

日本地質学会 *News*

Vol.2 No.9 September 1999



日本学術会議第18期会員候補者の推薦立候補について

日本地質学会執行委員会

日本学術会議第18期の会員（2000年7月22日任命）の選出にあたり、日本地質学会からの会員候補者と推薦人（同予備者を含む）の選定を以下の要領で行います。なお、日本学術会議および本学会内の日程については裏面をご参照下さい。

会員候補者については、従来通り推薦立候補を求め、正会員及び院生会員による通信投票で選出することとします。つきましては、推薦立候補の届け出を11月8日（正午、必着）までに受付けます。ただし、間に合わない場合にはとりあえず同時刻までにファクスでお送り下さい。推薦人（予備者を含む）については、12月の第3回定例評議員会で、決定された候補者ごとに選出を行います。

推薦立候補は下記の書式（A4判用紙使用）により、正会員・院生会員5名以上の推薦状に本人の承諾書を添え、執行委員会宛お送り下さい。その際、下記3研究連絡委員会のうち一つを必ず指定して下さい。

地質学研究連絡委員会（地質学会からの選定数1名）

地質科学総合研究連絡委員会（同 上）

鉱物学研究連絡委員会（同 上）

推薦立候補の受理は11月8日午後の執行委員会で行います。投票は、ニュース誌11月号に綴じ込まれる投票用紙により、関連研究連絡委員会ごとに通信にて行うこととします。投票締め切りは12月13日（月）（必着）とします。ただし、立候補者1名の関連研究連絡委員会については投票は実施しません。

推薦立候補届の書式

1999年 月 日		
日本地質学会 御中		
日本学術会議第18期会員 推薦立候補届		
正会員・院生会員		君を日本学術会議第18期会員候補者として推薦いたします。
関連研究連絡委員会：[		] 研究連絡委員会
推薦者（正会員・院生会員）		
1.	印	2. 印 3. 印
4.	印	5. 印

上記のとおり日本学術会議会員候補者として推薦を受けることを承諾します。ただし、関連研究連絡委員会は [] 研究連絡委員会とします。		
会員候補者 専 門 現所属		印

連絡責任者氏名		
住 所		
電 話		
E-メール		

日本学術会議第18期会員選出に関わる日程と手続きについて

日本地質学会執行委員会

日本学術会議第18期会員（2000年7月22日に任命）の選出にあたり、本学会として所定の手続きを日本学術会議会員推薦管理会に対して行う必要があります。本学会はその第1段階である学術研究団体登録申請を本年5月18日に行い、平成11年9月14日付けで同管理会から「学術研究団体」（登録関連研究連絡委員会：地質学、地質科学総合、鉱物学）として登録された旨、通知を受けました。管理会から提示された概略の日程は次のとおりです。

1999年12月下旬（予定）	関連研究連絡委員会の指定
同 12月下旬（予定）	会員の候補者の選定、推薦人の指名の依頼
2000年 2月15日（火）	会員の候補者の届出締め切り
同 2月21日（月）	推薦人（予備者を含む）の届出締め切り
同 3月20日（月）まで	会員の候補者の資格の認定等の通知
同 3月下旬	推薦人に会議開催等の通知発送
同 5月中旬から 6月上旬まで	推薦人会議（会員及び補欠の会員として推薦すべき者を決定）
同 6月中旬	日本学術会議を経由して内閣総理大臣へ推薦
同 7月22日（土）	第18期日本学術会議会員の任命

登録学術研究団体は、「関連研究連絡委員会」により区分される学術研究の領域ごとに所定の数の、会員の候補者を選定して届け出ることができます。本学会としては第17期と同様に、地質学研連、地質科学総合研連、鉱物学研連を登録しました。それらが「指定関連研究連絡委員会」として認められれば（12月下旬に通知がある予定）、それぞれについて1名ずつの候補者を届け出ることができます。さらに、それぞれの候補者について管理委員会から示される数（12月下旬に通知がある予定）の推薦人及び予備者を届け出ることになります。

本学会からの会員及び推薦人（予備者を含む）は以下の基本的方針・手順にしたがって行います。会員については従来通り推薦立候補制とし、複数立候補があった場合には会員による選挙を行います。推薦人（予備者を含む）については12月18日の第3回定例評議員会において選出することとしました。「関連研究連絡委員会」の指定、推薦人の数の配分が決まるのが、今回は上記のように12月下旬（予定）です。しかし、時間的な事情等を考慮し、本会が第17期と同様に「指定関連研究連絡委員会」として認められるとの見込みのもとに、第18期会員候補者の選出を行います。今後の日程を以下に整理して示します。

- 1) ニュース誌9月号に「会員候補者の推薦立候補に関する公示」と「会員選出に関わる日程と手続き」を掲載。
- 2) ニュース誌10月号に上記を再度掲載。広報を行う。
- 3) 推薦立候補の締め切りを11月8日正午（必着）とする。同日午後の執行委員会において受理。
- 4) 「関連研究連絡委員会」ごとに複数立候補の場合には、ニュース誌11月号に投票用紙を綴じ込み、会員（正会員と院生会員）に配布。投票締め切りは12月13日（必着）。
- 5) 第3回定例評議員会において、会員候補者を決定、併せて各候補者の推薦人と予備者を選出する。
- 6) 前記の所定の期日までに会員候補者と推薦人（予備者を含む）をそれぞれ日本学術会議会員推薦管理会に届け出る。

日本地質学会 *News*

Vol.2 No.9 September 1999

The Geological Society of Japan *News*

日本地質学会/〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6階

編集委員長 高橋正樹

電話 03-5823-1150 Fax 03-5823-1156

E-mail: geosocjp@ra2.so-net.ne.jp

ホームページ <http://www.soc.nacsis.ac.jp/gsj/>

Contents

日本学術会議第18期会員候補者の推薦立候補について/
日本学術会議第18期会員選出に関わる日程と手続きにつ
いて……巻頭

日本地質学会執行委員会

博物館紹介④ 徳島県立博物館 中尾賢一……2-3

地学英語雑感⑦ 地学でよく使う表現-5 嶋崎吉彦……4

紹介……5-6

ウィリアムJ. フリッツ・ジョニー N. ムーア著・原田憲一訳：
層序学と堆積学の基礎 (Basics of Physical Stratigraphy and
Sedimentology)

太田陽子：変動地形を探索Ⅰ 日本列島の海成段丘と活断層の
調査から、変動地形を探索Ⅱ 環太平洋地域海成段丘と活断
層の調査から/書評依頼・献本

ご案内……6-10

第7回太平洋地域第三系国際会議(メキシコ市)のご案内/第
113回化石研究会例会のお知らせ/第3回活断層調査成果報告会
の開催について/横浜国立大学 創立50周年記念公開講座-生
命・環境における情報フロンティアと新技術-生命情報学の目
指すもの~/科学者・技術者100万人集会 第9回「科学技術
振興・推進に関するシンポジウム」-科学技術と社会-/国際
シンポジウムZMPC 2000

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース(No. 18)の紹介

(2000年合同大会のお知らせ; 2000年合同大会九州大学
LOC/Western Pacific Geophysics Meeting (WPGM 2000) のお
知らせ)

地球観測衛星データを利用した研究公募のお知らせ

委員会だより……11-15, 17-19

各賞検討委員会: I. 日本地質学会「各賞」の問題点と新しい
各賞体系・素案の提案(1998年度活動報告) II. 「日本地質学
会国際賞」の名称変更:経過と現状 III. 第106年総会にお
ける国際賞(都城賞)不承認について IV. 1999年度各賞問題
検討委員会に付託した事項 V. 資料

地質基準委員会:「第一次地質基準案」に関する(社)全国地質
調査業協会連合会の見解

会員の声……16-17

「日本地質学会国際賞」の名称問題が提示したこと 嶋本利彦
追悼……19

川上 享氏のご逝去を悼む 金森邦夫

院生コーナー……20-21

日韓構造地質研究会 第2回合同大会報告 氏家恒太郎/若手
研究者懇談会のお知らせ

カレンダー……22

お知らせ 第106年学術大会(名古屋)行事委員会・準
備委員会ニュース

企画募集 地質学会第107年総会(筑波大学)における
シンポジウム・ショートコースの企画募集

The Island Arc 新規購読申込・変更届け出用紙

預金口座振替依頼書 自動払込利用申込書

会計委員会よりのお知らせ

1. 2000年1月より正会員会費が変更になります。

春の第106年総会において、正会員の会費が10,000円
から12,000円に変更になることが承認されました。総会
記事(7号ニュース)でもご報告していますが、改めて
お知らせいたします。

2. 自動引き落としによる会費の払込にご協力ください。

現在までに標記のお手続きをいただいた会員は1,000
名弱です。(本誌)巻末にも申込書をとじ込みましたの
で、11月10日までにぜひお手続きください。次年分の
引き落とし予定は本年12月24日の予定です。

3. 2000年会費の早期納入に関するお願い

経費節減に努力しておりますが、秋から年末にかけて
の運用財産の不足が心配されます。未納会費の回収を積
極的におこなっていますが、次年分の会費につきまして
も早期納入にご協力いただきますようお願いいたしま
す。

(会計委員長 佐々木和彦)

広告取扱: 株式会社廣業社

〒104-0061 東京都中央区銀座8-2-9 電話 03-3571-0997 (代) Fax 03-3571-2055

印刷・製本: 創文印刷工業株式会社



正面の建物のうち、右手が徳島県立博物館。

徳島県立博物館 Tokushima Prefectural Museum

徳島県立博物館学芸員 中尾賢一

徳島県立博物館は、徳島市の南部、園瀬川南岸の丘陵地に設置された文化の森総合公園の中にあります。この周辺は地質学的には三波川帯に属しており、公園の内外には結晶片岩が露出しています。紅簾石石英片岩などの産地として知られている眉山は、この公園の北北東3kmのところにあります。徳島市周辺で産する緑色片岩は「青石」とよばれ、徳島では好んで使われてきました。公園内の施設の内装や外装にふんだんに用いられています。

文化の森総合公園は、置県100周年を記念して1990年に建設されたものです。この中に、博物館のほか図書館・近代美術館・文書館・21世紀館の5つの県立の文化施設があり、全体としてひとつの複合文化施設として機能するようにつくられています。

徳島県立博物館は総合博物館で、学芸部門は自然課（地学・動物・植物）と人文課（考古・歴史・民俗・美術工芸）からなっ

ています。現在の正規職員は19名（事務3・教員2・学芸員14）です。このほかに、受付案内員（非常勤）8名、文化推進員（非常勤）4名、臨時職員3名が配置されています。自然課の学芸員は7名（うち地学分野は2名）です。学芸員以外には文化推進員2名と臨時職員1名がいて、データベースへの入力や標本作製などの仕事をしています。

【常設展】

当館の常設展は、総合展示・部門展示・ラブラタ記念ホールから構成されています。総合展示では、徳島の自然や文化が概観できるようになっています。地学関係の資料は、先カンブリア時代の岩石から更新世の哺乳動物化石まで、ほぼ時代順に配列されています。地学関係のコーナーには、「生命のおいたち」「太古の日本」「青石はかたる」「四万十帯の成長」「恐竜とアンモナイトの時代」「四国島のはじまり」「中央構造線の発達」「ゾウのきた道」などがあ



ります。主要な展示資料は、穴喰の漣痕（四万十帯南帯の舌状リップル：レプリカ）、チラノサウルスの全身骨格（レプリカ）、上部白亜系和泉層群の化石、鳴門海峽海底産のナウマンゾウ化石などです。1994年に発見された四国で初めての恐竜化石（イグアノドン科恐竜の歯）も、ここにあります。

部門展示は、個別的・分類学的な展示で、この中に岩石と鉱物のコーナーがあります。

ラブラタ記念ホールは、中央部に据え付けられたメガテリウム全身骨格（レプリカ）が特に目に付く部屋です。ここに展示されているのは、ラブラタ大学から寄贈されたアルゼンチン産の更新世哺乳動物化石で、大型の資料が約10点あります。このような資料をまとめて展示しているところは国内では他になく、たいへんユニークな展示です。

常設展示は開館以来、部分的な展示替えや展示品の入れ替えはありましたが、基本的な展示の構成には大きな変更がなく、今後、リニューアルをどう図っていくのかが大きな課題です。

【企画展】

企画展は、専用の企画展示室を使って年3～4回行われています。各分野・分類群の館蔵コレクションの紹介、各学芸員の研究に基づく地域自然誌や文化の紹介などのほか、全国規模の巡回展を開催することもあります。地学関係では、これまでに「和泉層群の化石」「鉱物の世界」「ネアンデルタール人の復活」「瀬戸内海のおいたち」などを開催しました。

【調査研究】

当館の調査研究活動には、複数の学芸員グループが特定のテーマを定めて年度単位で集中的に行う課題調査、各学芸員がそれぞれの分野や専門とするテーマにも基づいて日常的に行う調査研究、企画展のための事前資料調査などがあります。

総合展示。





ラブラタ記念ホール。

調査研究の成果を公表するため、当館では年1～2回研究報告を発行し、国内外の博物館や大学など約700か所の研究機関に発送しています。

【資料収集保存】

地域の総合博物館としては、地元徳島の自然や歴史・文化に関する資料は可能な限り網羅的に収集することは当然ですが、比較資料として四国や西日本の資料の収集や、海外まで目を向けた収集も行うよう心がけています。

地学資料には、学芸員・館員による採集品のほか、寄贈品や購入資料もあります。寄贈資料で多いのは、徳島県内や近隣地域の大型化石です。

収集した資料は、整理が終わった段階でデータベースに登録し、資料番号順に収蔵庫に収めています。データベースには資料管理用と一般提供用とがあり、両者は完全に切り離されています。学芸員が使うものはもっぱら資料管理用データベースです。これは各分野の学芸員がファイルメーカーProを使って、自らが最も使いやすいように構築しています。1998年7月24日現在、地学資料では化石2,856件、岩石・鉱物2,680件が登録されています。いっぽう一般提供用データベースは、各分野の資料管理データベースから産地や資料名、時代などの情報を抜き出して見やすくしたもので、図書館の図書や近代美術館の収蔵作品の情報とともに一般へ提供されています。これにかかわる作業は、元データの投入を



野外自然かんさつ
「地質ハイキング」。

除けば、21世紀館に常駐するシステムエンジニアが行っています。

一般提供用の情報には、現在のところ、館内にある情報端末や各家庭からのパソコン通信でアクセスできます。来年度からは、文化の森総合公園の5館全体で、インターネットに対応したシステムに移行することになっています。

【教育普及】

当館では、「開かれた博物館」をめざし、特に普及行事に力点をおいて取り組んでいます。また、博物館ニュースの発行、電子メールによる広報、友の会活動なども行っています。今年の7月には、正式なWebサイトも開設しました。ここでは、普及行事と博物館ニュースについて紹介します。

<普及行事>

徳島県立博物館では、大人から子どもまでの多様な要望に応えられるよう、野外自然かんさつ、歴史散歩、土曜講座、室内実習などのシリーズに分け、年間約60回にのぼるさまざまな普及行事を開催しています。事前の申し込みが必要なものもありますが、参加は無料です。野外自然かんさつは、基本的には現地集合現地解散で行います。たいていは県内で実施しますが、香川県や愛媛県まで足をのぼすこともあります。

地学関係の行事では、毎年いろいろなタイプのものを試みており、年によってタイトルや内容はかなり変化します。今年度の地学関係の行事と内容は次のとおりです。

- ・徳島市中心部の地質見学（徳島城周辺の結晶片岩やピルの石材の観察）
- ・川原の石ころしらべ（河原の礫種の見分

け方、比重の測定など）

- ・地すべり地を訪ねる（御荷鈴帯で実施）
- ・池田町の中央構造線（断層変位地形の観察）
- ・概説：徳島の地質（土曜講座、東四国の地質概説）
- ・貝化石標本のつくりかた（鮮新世貝化石のクリーニング）
- ・標本の名前をしらべる会（動物・植物分野と共同で、夏休みのおわりに実施）
- ・顕微鏡で鉱物かんさつ（双眼実体顕微鏡で火山灰中の鉱物を観察）
- ・ミクロの世界（走査型電子顕微鏡による微化石の観察）

<博物館ニュース>

年間4回発行しています。A4判8ページでオールカラーです。学芸員が行っている研究の解説、企画展の案内、収蔵資料の紹介、他館の展示案内、書評など、博物館活動に関わるさまざまな記事を掲載しています。

<利用案内>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：毎週月曜日（祝日、振替休日のときはその翌日）、年末年始（12月28日～1月4日）

常設展観覧料：一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円（20名以上の団体は2割引）

交通：JR徳島駅から徳島市営バス・徳島バス利用、約25分

所在地：〒770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園内

電話：088-668-3636 Fax：088-668-7197

e-mail：museum@staff.comet.go.jp

ホームページ：http://www.museum.comet.go.jp/default.htm

「瀬戸内海のおいち」展示解説。



文化の森総合公園周辺の図。

地学英語雑感⑦ 地学でよく使う表現—5

嶋崎吉彦

今回も、混同しやすい言葉について述べる。

Kind と type

種類・種別・類型・タイプなどを示す英語に迷うことがある。この場合、最も頻繁に使われるのが“kind”と“type”であるが、両者の違いは辞書を引いてもなかなか分かりにくい。“Suggestions”では次のように指示している。即ち一般的なグループやカテゴリーに関連して述べる際には“kind”の方が適切な表現である。例えば“kind of books”, “What kind of tree is it?” また逆に特定・特殊なグループやカテゴリーに関連する場合には“type”がより適切としている。“rock type, blood type, etc.” これを一つの目安として考えてよからう。

Lie と lay ; overlie と underlie

“Lie”と“lay”は前者が自動詞で後者が他動詞と、全く異なる言葉であるが、“lie”の過去形が“lay”であり、似ているため混同しやすい。これは我々だけではなく、英語国人にとっても同様のものである。

“Lie”の動詞の変化は; “lie, lying, lay, lain”であり、「横たわる、休む、位置する」という意味であり、目的語は不要である。例文としては、“the sandstone lies on the shale,” “he is lying on the bed,” “they had lain there for centuries,” などが“Suggestions”に出ている。

一方“lay”の方は“lay, laying, laid, laid”と変化し、「を置く、を据える、をならべる、を寝かす、の上にかぶせる」などの意味に地学では使われ、目的語が必要である。例文、“water-laid sediments”は「水の作用で置かれた(堆積した)堆積物」であって、他動詞である、“he laid the book on the table,” “lay (place) your head on the pillow.”

次の“overlie”と“underlie”は地学でよく使う言葉で、いまさら説明の要はなからう。ただ此処で述べる理由は、この両語は他動詞であるにも拘わらず自動詞の“lie”と同じ変化をすることである。従って“overlie, overlying, overlay, overlain”となる。“Overlaid”ではない。この点は比較的頻繁に混乱した使い方が目に付く。例文は; “the upper beds overlie the lower beds,” “the upper beds are underlain by the lower beds.”

Part と portion ; partly と partially

“Part”と“portion”は同意語のように扱っている辞書もあり、またしばしば我々も同様に「部分」の意味で使っているが、“portion”には「割り当てられた、配分された」部分とのニュアンスがある。例として

“Take your portion and go.” 従って、このような意味を含まない文章のときは、“part”を使う方がよいと思う。

次に“partly”と“partially”も同意語として扱われることが多い。しかし“Suggestions”では、単に「全体の一部」については、“partly”がよい。例えば、“the valley is partly filled with alluvium.” 「部分的」の中に「程度、度合い」の意味が含まれているときは、“partially”を使えという。例えば“the Leadville Limestone was partially metamorphosed,” “this outcrop has been partially weathered.” これについては、多くの米国の地学屋はその微妙な違いを見いだせないだろう、とこの著者は言っている。筆者は此処に書いている“partly, partially”の用法に違いをつけることには賛成である。

Rare, scarce, scanty, sparse

我々はこの4語を何となく「希、僅か」のような意味に漠然と使っている。しかしこれらには、それぞれ異なるニュアンスと用法がある。まず“rare”は; 本当に僅かしか存在しないものについていう、“rare coin” “rarely euhedral” 等である。一方“scarce”は; ごく普通に存在するものが、局所的あるいは時間的に多くない状況をいう。例えばある種の化石がある地層の大部分に豊富に産出するが、その地層の特定部分にはほとんど産出しないような場合は“scarce”であって“rare”ではない。“Outcrops are scarce in the deeply weathered saprolite.”

また“scanty”は「不十分、かろうじて足りる」というようなニュアンスを持っている。よく出てくる例では“scanty rain”などである。“Sparse”は薄く広がる、あるいは散在する状態の表現である。“Sparse crystals of pyroxene,” “sparse gray hairs on a shining pate,” 等が例として出ている。

Sporadic, occasional, intermittent, interval

“Sporadic”は基本的には空間的な; 不連続性、不規則性、孤立した存在、まばらな、「散在する」状況などを示す言葉である。“Occasional”は主として時間的な、不連続性、不規則性、つまり「時々おきる」状況を示す。

一方“intermittent”は空間的・時間的に、不規則な「隔たり」(interval)をおいて現れたり消えたりすることを繰り返す状況を示す。似た表現の“recurrent”は最近地震の“recurrence interval”などで有名になったが、これは「繰り返す」点を強調した表現で、“intermittent”は「継続しないで途切れる」

点を強調した表現である。“Interval”はごく普通に用いられる表現で、時間的・空間的な間隔を意味する。ただし地学特有な用法としては、層準間の厚さを示す、“the rocks in this interval are sandstone and shale.” この場合は厚さを示すもので、岩石そのものを指すのではない、と“Suggestions”では強調している。

Succession, sequence, と series

地質用語としての“succession, sequence, series”は此処で述べるまでもないが、一般的な用法を少し考えてみる。この3語は、何らかの順序や計画に従って、時間的・空間的に並んでいる状態を示すもので、同意語に近いが、それぞれ特有のニュアンスをもっているようである。この中では“succession”が最も一般的に使われている。“Sequence”は物や事象の間に比較的近い関係がある場合に使うようであり、決まった順序で繰り返される事象、例えば季節の“sequence”など、にも用いられる。“Series”は似た性質を持った物や相互の関係が似ている物についていう。

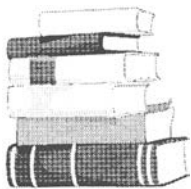
Typical, distinctive, characteristic

この三つの言葉は、ごく普通に使われているものであるが、意外に正確な用法が理解されていないように思われる。“Typical”は、人や物が特定のグループやタイプに「共通で特徴的な性質」を持っていることを示す表現である。この反対に“distinctive”は、人や物が特定のグループやタイプの中で、「他と違い、際立った個性(individuality)」を持っていることを示す言葉である。一方“characteristic”は特定の人や物の特徴であって、区別したり、見分けたり、する性質の表現である。

Give, present, dedicate

最近この3語について、気のついたことがあったので、此処で述べる。順序がおかしかったのは、お許しいただきたい。まず“give”はこの3語のうち最もよく使われる言葉で、説明不要であろう。ただしインフォーマルな会話や、親しい人の間とはともかく、論文や報告書など公的文書や講演などでは、人に「贈る」意味のときの“give”は同格か下の人に「与える」のニュアンスがあることは覚えていて良いと思う。動詞の“present”は上下関係なく「贈る」であり、“dedicate”は「捧げる、献呈」などである。夢々自分の仕事を誰かに「捧げる」ときに“give”を使わないように、注意されると良い。

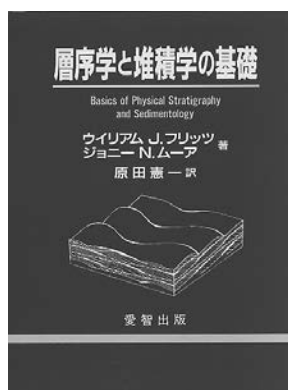
混同しやすい表現はこのくらいにして、次回は、地学用語の英語について述べてみようと思っている。



紹介

層序学と堆積学の基礎 (Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology)

ウィリアム J. フリッツ/
ジョニー N. ムーア
訳者：原田憲一



愛智出版 1999年6月発行, A5判, 400
ページ, 図判総数300葉, 定価5200円+
消費税260円 原著出版社: John Wiley
& Sons社 ISBN4-87256-406-5 C3044)

層序学 (Stratigraphy) では、層状をなした岩体 (地層) の積み重なり方に重点をおいて堆積環境や地史を明らかにすると共に、多くの地域で層序対比を行ってより広域の地質現象を把握することを目的としている。しかし、層序学の基本である「地層累重の法則」が適用できない地層の逆転などがある場合には、堆積構造や岩質などに着目して層序を明らかにする必要があるため、層序学は堆積学や堆積岩岩石学と深く関わっている。一方の堆積学 (Sedimentology) は小規模な堆積構造や細かい岩石学的記載に重きをおき勝ちであるが、運搬・堆積作用など堆積物が形成され、続成作用で堆積岩となる過程を研究することが目的である。本書のねらいは、層序学とそこから派生した堆積学を結び付けることであり、堆積岩の重なり方の記載・分類・解釈を解説しているが、特に堆積物の運搬と堆積に関わる物理的諸作用が手際よく解説されている。

第1章の層序学の解説では、成層した岩体の解釈に関する諸法則を研究の発展をたどりつつ記述している。第2章では岩石単位の命名法を北米地層命名規約にしたがって説明

し、堆積岩の命名法と分類法を紹介している。第3章では堆積構造を分類・詳述している。第4章～第8章では一方向に流れる水と空気、および二方向の流れと土石流による堆積物の運搬と堆積に関する原理を述べている。そのうち、第4章と第5章では堆積過程における物理作用と流れ領域の概念が解説されている。流れ領域の概念は堆積相解析にとって極めて重要な基礎知識である。第6章～第8章では砂漠、海岸、傾斜における堆積物の運搬と堆積が扱われているが、特に第7章は大型化石を扱う古生物学者にとって化石の生息環境や産状を理解する上で有用であり、第8章の土石流に関する解説は斜面防災にも役立つ。結びの第9章では堆積相解析の原理と堆積相モデルを紹介している。なお、堆積相モデルと現世堆積環境との関係については Walker 編集 (1984) 「Facies Models」を本書の副読本として使用することを勧めている。

巻末にある用語簡易解説集、英対照用語集、事項索引は充実しており、学生・大学院生のみならず、堆積学的な基礎知識を必要とする研究者にも一種の堆積学辞典として利用できて有用である。難を言えば、余白が少なく読みづらい。また、層序学や堆積学が野外科学の重要な一分野を構成するにもかかわらず、写真が鮮明でないのは残念である。

欧米ではこのような優れた「層序学」や「堆積学」の教科書が多数出版されていて、原著は10年前に書かれた学部学生用の教科書であり、その3刷は現在も使用されている。本書は、初歩的な一般地質学と地史学しか学んでいない学生を対象としているので、各章ごとに参考文献と巻末に引用文献の出典を多数あげてあり、原論文に当たることが配慮されている。ところで、日本語の著作はもちろんのこと、翻訳もきわめて少なく、地球科学を勉強しようとする学生諸君に不利な状況となっていることは残念なことである。

(小泉 格)

変動地形を探るⅠ 日本列島・海成段丘と 活断層の調査から

変動地形を探るⅡ 環太平洋地域・海成段丘と 活断層の調査から

太田陽子著



古今書院 1999年4月2日発行, B5判
I, 204ページ, 本体価格 (6,200円+税)
ISBN4-7722-1410-0
II, 216ページ, 本体価格 (6,400円+税)
ISBN4-7722-1411-9

地質学や自然地理学は、ある地域の成り立ちと生い立ちを解明し、地域的な情報から地球の営みに関する一般則を導く研究分野といえよう。そのため、自然界にいろいろな形でインプットされセーブされてきた多様な情報を引き出すための手法が数多く開発され利用されている。しかし、当然のことながら、一人の研究者が地球全域を踏査できるわけではなく、調査範囲に限界がある。野外調査に取り組む地球科学者の多くが “Act locally, think globally” を目指すのはそのためである。

本書は、海成段丘、活褶曲、活断層など地殻変動の地表への表現である「変動地形」に魅せられた著者が、50年間近くの調査・研究によって得た成果をまとめたユニークな書である。「変動地形一般を述べたものではなく、いわゆるテキストでもなく、テーマと地域に偏りがあり、良くも悪くも私の変動地形研究ノートである」と著者自身が精言 (はじめに) で述べている。記述された内容のすべては、著者自身が足を運び、フィールドサイエンティストの目で確認した記録 (道跡) である。したがって、本書で取り上げられている地域が日本列島全域ないしは環太平洋全域を完全にカバーしないのは当然であろう。それにしても、著者が辿った道程の長さに圧倒され、本来1冊にまとめて出版する予定だったものを分冊して刊行しなければならなくなったことに納得させられる。

両巻を通して、先ず著者の変動地形に対する貪欲なまでの好奇心とその解決に向けた旺盛な実行力に驚かされる。それぞれの調査地で得た “local” な研究成果を積み重ねて、それらを “regional” な問題解決へと発展させ、ついには調査対象地域を環太平洋域にまで広げている。この上は “global” な変動地形一般に関する著書の刊行が待たれるが、その計画もあるという。大いに期待したい。

また、後で紹介するように、取り上げられている地域や内容は多岐にわたるが、本書は、読者に堅苦しい教科書的な専門書の印象を与えない。それは、テーマごとに完結した内容としてまとめられた章立てとその初めに「なぜその地域を取り上げたか」、「その地域にはどのような問題があり」、「どのような考え方の変化があったか」など、当該地域の調査の背景と調査・研究の手順があたかも講義や講演を聴くような語り調の文章で綴られているためだろう。本文中の図表類のいくつかは、原著論文の中のものが描き改められたためか、非常に見やすい。それにも増して、立体視できる空中写真など多数の写真類が、内容の理解を助けている。ただ、日本列島編だけでなく、目次の後に本書に取り上げられている地域の位置図 (索引図) を載せて欲しかった。

以上のように、本書は、野外調査への入門書的な性格もあるが、活構造やネオテクトニクスなど地殻変動に関心をもつ専門家（本学会会員）には研究テーマを考える指針書の一つとして、活断層調査などに携わる地質コンサルタント会社等にとっては調査の際の参考資料として役立つだろう。また、大学等の研究機関で地質および地形野外巡検を企画する際の参考資料としての利用価値も高い。

以下に、本書の構成を紹介するため、章および節の見出しを列記する。

[日本列島編]

I. 日本海沿岸

1. 奥尻島, 2. 函館平野西縁の活断層, 3. 東北日本日本海沿岸の海成段丘の変形に関する資料二, 三, 4. 西津軽における海成段丘の二次的变化, 5. 庄内平野の東縁, 6. 粟島, 7. 佐渡島の海成段丘の変形と活断層, 8. 1802年の小木地震による海岸隆起とその累積, 9. 能登半島の海成段丘, 10. 能登半島の活断層, 11. 越前海岸の海成段丘, 12. 浜田地震(1872年)による海岸の隆起

II. 糸静線中部と信濃川沿岸

13. 糸静線中部の変位地形とトレンチ調査,

14. 信濃川沿岸の活褶曲による河成段丘の変形, 15. 層面滑り断層, 16. 十日町盆地の活断層とトレンチ調査

III. 太平洋岸の海岸地形

17. 房総半島南端の完新世海成段丘, 18. 三浦半島の右ずれ活断層, 19. 初島, 20. 丹那断層, 21. 完新世段丘の年代と環境変化, 22. 鈴鹿山地東縁の活構造, 23. 野島地震断層崖の変化過程, 24. 野島地震断層崖の活動と海岸の隆起, 25. 土佐湾北東岸の海成段丘, 26. 足摺岬周辺の海成段丘

IV. 南西諸島のサンゴ礁

28. 喜界島, 29. 与那国島, 30. 波照間島, 31. 南・北大東島, 32. サンゴ礁段丘の隆起様式と速度の変化

[環太平洋編]

I. ニューギニア

1. 北島プレントイ湾岸の海成段丘, 2. 北島東岸の完新世海進堆積物, 3. 完新世海成堆積物中の埋没林, 4. 東海岸にみられる完新世段丘の細部, 5. 北島東岸の侵食の加速と崩壊地の形成, 6. マタタ断層とエッジカム地震, 7. ウェリントン断層, 8. ニュージ

ーランドの首都、ウェリントン付近の海成段丘の変形, 9. 南島北東部マルバラ海岸の更新世海成段丘, 10. 南島北東部マルバラ海岸の多様性, 11. アルパイン断層とその枝断層, 12. アカトレ断層, 13. ニューギニアのそのほかの断層

II. パプアニューギニア、ヒュオン半島

14. ヒュオン半島のサンゴ礁段丘, 15. テワイ川河口の隆起三角州, 16. 完新世サンゴ礁段丘からみた完新世海進, 17. 完新世サンゴ礁段丘, 18. 更新世サンゴ礁段丘にみられる地震隆起のあと, 19. サンゴ礁段丘にみられる崩壊地形と堆積物

III. 北および南アメリカ

20. アメリカの海成段丘の諸相, 21. アメリカ合衆国西岸の活断層, 22. 地震に伴う沈下, 23. チリ中央部, タリナイ山地の海成段丘と活断層, 24. チリ北部, メヒヨネス半島

IV. 台湾とチュニジア

25. 台湾の活断層, 26. 台湾東岸の完新世海成段丘, 27. チュニジアの海岸

(大村明雄)

■書評依頼・献本■

・「三笠市立博物館紀要」自然科学第3号

松本達郎・川辺文久・川下由太郎・長谷川浩二：アンモナイト *Mortonicerias rostratum* とそれに関連する諸問題/T. Matsumoto, H. Hayakawa and S. Toshimitsu : An ammonite species of *Sharpeieras* from Madagascar/星 博幸・高嶋礼詩：北海道中央部、富良野地域の空知層群火山岩に対する古地磁気解析ほか8編

・「新版 講事堂の石」工藤 晃・大森昌衛・牛来正夫・中井 均 158p. 定価1500+税 新日本出版社

・“3-D Structural Geology : A Practical Guide to Surface and Subsurface Map Interpretation” by Richard, H. Groshong, Jr. Springer-Verlag, 324p.

・「三菱財団30年のあゆみ」(1969-1999 昭和44-平成11)

・「海から生まれた神奈川」神奈川県生命の星・地球博物館・横須賀市自然・人文博物館, 1999年7月発行, 定価1,000円 98p.

・「伊豆・小笠原弧の研究—伊豆・小笠原弧のテクトニクスと火成活動—」神奈川県立博物館調査研究報告(自然科学)第9号 神奈川県生命の星・地球博物館 1999年3月 188p.



ご案内

国会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します。

第7回太平洋地域新第三系国際会議（メキシコ市）のご案内

表記国際会議が本年10月3日-6日にメキシコ国立大学で開催されます。今回は特に“21世紀に向けての太平洋地域における新第三紀の研究”のテーマの下に全体会議が計画され、また、10月1日-3日にメキシコ湾岸の巡検、10月8日-10日にパナマ地峡の成立に関連した太平洋と大西洋の両者の関係の野外討論が予定されています。講演要旨のメスは9月15日ですが、参加の申込みは9月30日まで受け

付けますのでぜひ御参加下さい。成田、関西から同日メキシコ市に到着できます。

プログラム

10月1日(金)-3日(日)

Field Trip 1: Tuxpan area, Gulf coast

10月3日(日) Registration, Welcome Party

10月4日(月)-6日(水)

Scientific sessions, Reception

10月7日(木)

Tour to Archeological site

10月8日(金)-10日(日)

Field trip 2, La Paz と Baja Calif.半島

Registration fee : US\$ 90 (含要旨集, Welcome party, Reception等) 支払はRegistration deskでどうぞ。

Registration :

1. 氏名, 2. 連絡先, 3. Fax と E-mail, 4. 発表題目(講演・ポスターの区分) 5. 巡検の参加, 6. 予約したいホテル(1泊 Single US\$ 52, 61, 98, 165, 180の5つ)を選びお知らせ下さい。

Abstract : 1. 演題, 2. 氏名, 3. 所属・連絡先, 4. 本文500語以内 Dr. A. Molina-Cruz 宛9月15日までにE-mail Ms-Ward file か plain textでお送り下さい。

Field Trip 1 : 10月1日7:00-3日 18:00, バスによる巡検 US\$ 230 (含宿泊・食事), 10月1日朝ホテルへバスが迎えにきます。

Field Trip 2 : 10月8日-10日, US\$ 500 (航空券, バス代, 宿泊2泊分, 食事)

天候 : ほぼ晴天, 夜12°C, 日中12°C-24°C
メキシコ市国際空港に到着したならば : 予約したホテル名と所在地を言って, タクシーブースでタクシー券を購入して下さい。タクシーブースは国際線到着(ターミナルD)の税関を出たすぐ左側にあります。料金は160メキシコ・ペソ (=US\$ 15) 以下。

ホテルに到着したら UNAM (Univ. Nacional Autonoma de Mexico) における RCPNS Congress に参加のため来たことを伝えチェックインして下さい。会場はメキシコ国立大学植物園集会場を予定。ホテルから会場まで毎日送迎します。なお、必要

な場合はメキシコ市内から54461403, 56225805, 56225806, 56225836の何れかに英語またはスペイン語で電話して下さい。
Registration送付先: Dr. Adolfo Molina-Cruz, Organiz. Comm. VII-RCPNS, Inst. Cien. Mary Limnol., UNAM, Ap. Post. 70-305 Ciudad Universitaria, Mexico D.F. 04510 Mexico
Fax: (52)-5-616-0748
E-mail: amolina@mar.cmyl.unam.mx
日本の連絡先: 土 隆一, 〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所
電話 054-238-3240 Fax 054-238-3241
E-mail: vyz01052@nifty.ne.jp
2ndサーキュラー (hotelの名前, 所在地等記載あり) ご希望の方はお送りしますのでご連絡下さい。

(土 隆一)

第113回化石研究会例会のお知らせ

1999年10月23日(土)から25日(月)に、岡山大学理学部付属牛窓臨海実験所において、第113回化石研究会例会を開催します。シンポジウム「地球の環境と生物の進化」と野外観察会が予定されていますので、ふるってご参加ください。

日 時: 1999年10月23日(土)~25日(月)
会 場: 岡山大学理学部付属牛窓臨海実験所
岡山県邑久郡牛窓町鹿忍130-17
電話 086934-5210 Fax 086934-5211
世話人 白井浩子

交通: 1) 山陽新幹線の岡山駅下車, つづいてJR赤穂線の西大寺駅下車。西大寺駅からは「南まわり牛窓行き」のバスに乗り、「水産試験所入口」で下車, 徒歩約700m。
2) 山陽新幹線の岡山駅下車, つづいてJR赤穂線の邑久駅下車。邑久駅からは「北まわり牛窓行き」のバスに乗り、「牛窓町役場前」で下車, 徒歩約1,400m。

参加費: 500円(当日会場の受付にて集めます)

日 程

23日(土)

シンポジウム「地球の環境と生物の進化」

—1日目—

13:00-14:00 地球環境の地球史の変遷……秋山雅彦(札幌学院大学)

14:00-15:00 独立栄養起源説と古細菌/真正細菌の分化について……古賀洋介(産業医科大学)

15:00-16:00 糖の化学安定性と生物反応としての糖……平林 淳(帝京大学)

16:00-17:00 SNS原始遺伝暗号仮説と生命の起源……池原健二(奈良女子大学)

17:00-17:30 休憩・軽食

17:30-18:30 単細胞藻「円石藻」の石灰化機構……岡崎恵視(東京学芸大学)

18:30-19:30 細胞数が20~45の多細胞動物(ニハイチュウ)の生活……越田 豊

(高知工科大学)・古屋秀隆(大阪大学)
19:30-20:30 扁形動物無腸類は退化的な動物か?……山本雅道(岡山大学)

20:30- 食事・懇親会*

*懇親会は臨海実験所内でおこないます。参加者にはお国自慢の飲食物を何か一品(少量)お持ちいただきたいと思います。

24日(日)

シンポジウム「地球の環境と生物の進化」

—2日目—

9:00-10:00 前口動物の石灰化の起源と進化……大森昌衛(元麻布大学)

10:00-11:00 初期発生の進行—エネルギー蓄積が退化を許容する——白井浩子(岡山大学)

11:00-12:00 脊椎動物の発生プランと進化……倉谷 滋(岡山大学)

12:00-13:00 ヒトの獲得したものと退化したもの……小寺春人(鶴見大学)

13:00- 昼食、懇談の後シンポジウムは散会。引き続き野外観察会へ。

野外観察会

午後 シンポジウム散会后, 野外観察会(予約不要)。

実験所近くの海岸にて観察会。

25日(月)

近くの島へ, 日帰り観察会(予約必要)。

船の使用ができます。定員は船長を含めて31名です。

参加申込み・問い合わせ:

例会に参加希望の方は, 下記までご連絡ください。

〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050

新潟大学理学部地質科学教室 小林巖雄研究室 気付 化石研究会事務局

Fax 025-262-6194

E-mail: iwaok@sc.niigata-u.ac.jp

第3回活断層調査成果報告会の開催について

科学技術庁では、国及び地方自治体が平成10年度に実施した活断層調査の成果等を広く普及するため、第3回活断層調査成果報告会を下記により開催します。報告会では、発表の他ポスターセッションの展示などを行います。参加ご希望の方は下記までファックスまたははがきにてお申し込み下さい。

日 時: 平成11年11月8日(月)

9:30~17:00, 9日(火) 9:30~17:00

会 場: 笹川記念会館 国際ホール(東京都港区三田3-12-12)

主催: 科学技術庁

目的: 国及び地方自治体が実施する活断層調査の成果等を発表し, これを広く普及させるとともに, 専門家等の意見を今後の調査へ反映させることを目的として, 成果報告会を開催する。

内容:

<報告会>

1日目 国の機関の発表

地方自治体が実施した活断層調査のうち, 平成10年度で調査が終了した断層についての発表

2日目 地方自治体が実施した活断層調査のうち, 平成11年度も調査継続中の断層についての発表

<ポスターセッション>

発表を行った断層調査についてポスターセッションも行う。なお, プログラム等詳しい内容につきましては, 下記問い合わせ先までご連絡ください。

定員: 800名(先着順)

参加費: 無料

申込方法: ファックスまたははがきに, 氏名, 住所(勤務先又は自宅), 電話, ファックス番号, 勤務先名を明記の上, 下記までお送り下さい。11月2日(火)締め切り。

問い合わせ・申込先: 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-5-18 千代田本社ビル5階(財)地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター活断層報告会係

電話 03-3295-1501 Fax 03-3295-1507

横浜国立大学 創立50周年 記念公開講座

生命・環境における情報フロンティアと新技術

~生命情報学の目指すもの~

主催: 横浜国立大学(インターネットホームページ <http://www.ynu.ac.jp>)

後援: (社)化学工学会 関東支部, (社)石油学会, (社)日本化学会 関東支部, (社)日本機械学会, 放送大学神奈川学習センター(五十音順)(予定)

趣旨: 現在, 急速に普及しているインターネットの世界は, 生命システムに近いと考えられているのをご存知ですか。情報ネットワークは生きています。人類が生き残っていくためには, 地球生態系への負荷が低く, それと調和できる科学技術を創り上げていく必要があります。このような科学技術を情報と生命を軸に創りあげようとするのが生命情報学です。遺伝情報やホルモン系などの分子レベルから生物と自然環境との相互作用によって成り立つ生態系まで, 生命システムの情報ネットワークに学び, 人に優しい情報科学技術の夢を実現させるための最先端の取り組みを分かりやすく紹介します。

日 時: 1999年11月13日(土)・11月20日(土) どちらの日も13:00~17:10

会 場: 横浜国立大学 教育文化ホール(横浜保土ヶ谷区常盤台79番地)

定員: 100名(受講料の到着順で受付)

受講料: 2日間で5,500円(消費税不要)

申込締切: 11月5日(金) 受講料必着

プログラム:

<11月13日(土)>

1. 挨拶 (13:00~13:10)
横国大 工学部長 山口 惇
2. 遺伝情報の姿を見る (13:10~13:55)
横国大工学部 教授 上杉晴一/横国大工学部 助教授 片平正人
3. 脳と言語処理 (13:55~14:40)
横国大教育人間科学部 教授 田村直良/横国大工学部 助教授 森 辰則
4. 生命情報伝達系と環境ホルモン (14:40~15:25)
横国大工学部教授 浦野紘平
5. 環境データの情報化と環境リスク管理 (15:40~16:25)
横国大環境科学研究センター 教授 中西準子
6. 生命情報と分子機械 (16:25~17:10)
横国大工学部教授 阿久津秀雄

<11月20日(土)>

1. 化石と地層から復元された太古の横浜の海底 (13:00~13:45)
横国大教育人間科学部助教授 間嶋隆一
2. 3次元データからの人間の動作・意図の解析 (13:45~14:30)
横国大工学部教授 有澤 博
3. 人間型ロボットの開発 (14:30~15:15)
横国大工学部教授 河村篤男
4. 地球温暖化とマングローブの森 (15:30~16:15)
横国大教育人間科学部助教授 持田幸良
5. 地球をまるごと計算する (16:15~17:00)
横国大工学部助教授 奥田洋司
6. 閉講の挨拶と修了式 (17:00~17:10)
横国大工学部 公開講座等運営委員会 委員長 玉野研一

申込方法・問い合わせ:

お申込は下記に募集要項をご請求するか
下記URLのホームページをご覧ください。

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79番5号

横浜国立大学工学部 第二部・生涯学習係
電話 045-339-3822 (平日の10:00~17:00)

Fax 045-339-3829

E-mail: eng.shougai@jim.ynu.ac.jp

URL <http://www2.bsk.ynu.ac.jp/~koukaikouza>

科学者・技術者100万人集会

第9回「科学技術振興・推進に関するシンポジウム」

—科学技術と社会—

開催趣旨: 最近の科学技術は急速に進展し、一般社会との間に認識の違いが生じていることは否めない。とくにハイテク産業は、経済の変動を引き起こし、社会秩序を転換させようとしている。その中でインターネットの普及、高度先端医療の充実等が、私

達の日常生活を変えようとしている。このような変化は、多くの疑問を生み、社会生活と密着した新しい科学技術の創造を期待している。そこで、本シンポジウムでは、いままでと異なった側面から科学技術を論じて見ることにした。

日時: 平成11年12月17日(金) 13:20~17:20

会場: 鹿島KI 地下大会議室

東京都港区赤坂6-5-30

(電話 03-5561-2111)

主催: 社団法人日本工学会

協賛: 日本工学会加盟100学協会

幹事学会: 日本物理学会/日本鋳造工学会/

日本建築学会/土木学会/映像情報メディア学会/日本化学会

—プログラム—

13:20~13:00 挨拶

日本工学会会長 大橋秀雄

13:30~14:10 基調講演「何故“科学・技術と社会”なのか」

国際基督教大学教授 村上陽一郎

14:10~14:50 基調講演「21世紀の工学像」

東京大学工学部長 中島尚正

14:50~15:00 休憩

15:00~15:20 話題提供「科学技術と社会、その背景」

電気通信大学助教授 小林信一

15:20~15:40 話題提供「科学技術史からのアプローチ」

東京工業大学助教授 中島秀人

15:40~15:50 休憩

15:50~17:20 パネルディスカッション

司会 新日本製鐵

(株)顧問 富浦 梓

パネラー: 小林信一 電気通信大学助教授/

中島秀人 東京工業大学助教授/西村吉雄

日経BP社編集委員/橋本典子 青山学院

短期大学教授/石田秀輝(株)INAX空間デ

ザイン研究所長

☆懇親会☆

17:30~19:30

会場: 鹿島KI 2階ラウンジ

会費: 7,000円(当日持参)

—参加申込みについて—

参加費: 3,000円

参加申込: 往復ハガキに氏名・勤務先・同住

所・同電話番号・所属学協会名・会員番号

を明記した上、返信ハガキ表に通信先住

所・氏名を必ずご記入下さい。(Faxでの

お申込みは受付ません)

懇親会: 懇親会参加希望の方は、その旨ハガ

キに明記して下さい。

申込期日: 平成11年11月30日(火)

申込先: 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41

社団法人 日本工学会「12月シンポジウム」

係宛

参加証: 会場地図を入れた参加証(返信ハガ

キ)をお送りいたしますので、当日ご持参

の上、受付にご提示下さい。

国際シンポジウム ZMPC 2000

International Symposium on Zeolites and Microporous Crystals

主催: ゼオライト学会

共催: 日本地質学会ほか

日時: 2000年8月6日(日)~8月9日(水)

会場: 仙台国際センター(仙台市青葉区青葉山)

特別講演

Growth Models of Microporous and Mesoporous Materials (UMIST, UK) M.W. Anderson

Unique Surface and Catalytic Properties of Mesoporous Aluminosilicates (France, ENSCM) F. Fajula

High Throughput Experimentation in Zeolite Chemistry: Prospects for Combinatorial and Computational Techniques (Molecular Simulations, USA) J. M. Newsam

Mesoporous Molecular Sieves with Wormhole Framework Structures (Michigan State University, USA) T. J. Pinnavaia

Ti-containing Hydrophobic Zeolites and Mesoporous Molecular Sieves as Liquid-phase Oxidation Catalysts (Yokohama National University, Japan) T. Tatsumi

Base Catalysis on Microporous and Mesoporous Materials - Recent Progress and Perspectives (University of Stuttgart, Germany) J. Weitkamp

招待講演(一部)

D. E. Akporiaye (Norway), M. A. Camblor (Spain), B. Chmelka (USA), J. F. Haw (USA), R. F. Lobo (USA), L. McCusker (Switzerland), M. Nakano (Japan), M. Payne (UK), V. Ramamurthy (USA), P. Ratnasamy (India), J. Sauer (Germany), F. Schüh (Germany), M. Tsapatsis (USA), R. A. van Santen (The Netherlands), I. Wang (ROC), O. M. Yaghi (USA), J. Yu (China)

講演申込締切日: 平成11年10月31日(日)(必着)

講演申込方法: ゼオライト学会会員の方は「ゼオライト」Vol. 16 No. 3をご覧ください。それ以外の方は下記までE-mailまたはFaxにてSecond Circularをご請求下さい。

ホームページ <http://www.zmpc2000.aki.che.tohoku.ac.jp>でもSecond Circularをご覧ください。

Circular等問い合わせ先:

〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉07
東北大学大学院工学研究科材料化学専攻
宮本 明

電話 022-217-7233 Fax 022-217-7235

E-mail: zmpc2000@aki.che.tohoku.ac.jp

上記ニュースが8月10日に発行された。巻頭には「合同大会と連絡会の現状と課題」と題する大谷栄治連絡会幹事会会長の現状分析と問題提起があり、合同大会の発展を訴えている。ついで、1999年大会合同大会北海道LOCの総括「1999年合同大会を終えて」が掲載され、全体的総括、会計報告、電子化の継承と外注化、会場、アルバイト、ポスター、宿泊、企画・広報の順で各係りのまとめと今後の課題が報告されている。各係りの多くの方の努力と苦勞とが合同大会を支えている実状がよくわかる。特に「電子化」の努力には目を見張るものがあり、地質学会学術大会の将来

を考える上で大変参考になる。次に九州大学LOCが中心になって開催される2000年合同大会、およびそれと一部同時で連続して開催されるWPGMの案内が掲載されている。A4判2段組で14p.におよぶ大部のもので全部は掲載できないので、地質学会のホームページ (<http://www.soc.nacsis.ac.jp/gsj/>) に掲載しておくので、ぜひ一読ください。なお、2000年合同大会およびWPGMの要項については次の記事に掲載しています。

(行事委員長 公文富士夫)

2000年合同大会のお知らせ 2000年合同大会九州大学LOC

【1】大会委員長の挨拶 (大会委員長 柳 暉)
(省略)

【2】2000年合同大会の運営基本方針について (実行委員長; 湯元清文)
(前文省略)

<九大LOCの運営基本方針>

- (1) 1999年度に据え置いた登録料の値上げをする。
1999年は、事前登録：一般¥5,000、学生¥2,000；当日登録：一般¥8,000、学生¥5,000であったが、2000年大会では、それぞれ¥1,000ずつ値上げする。
- (2) JCOMには1999年度並の作業と2000年のセッション募集・編集の開発を含めた作業をお願いする。これにより、プログラム編集委員会の作業と旅費の削減をはかる。
- (3) スライド、OHP等の学会発表に最低必要な設備は取り込むが、無駄な会場、機材などの使用の見直し検討を行う。
- (4) 受益者負担の原則で印刷物、CD-ROM等は登録者・希望者のみ配布・販売し、ダイジェスト版の案内印刷物は各学会から配布する。この案内経費や、研究打ち合わせ会議、企業展示などにかかる経費は受益者から徴収する。
- (5) 2001年以降に繋げるためのWWWの維持、管理、開発費（～390万円）については、(1)～(4)により200万円以下の赤字になるよう努力し、各学会の理解を得る。

【3】プログラム委員会からのお知らせとお願い (プログラム委員長; 村江達士)

2000年合同大会は、6月25日(日)～6月28日(水)に、代々木国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されます。2000年合同大会のプログラム編成方針は、基本的に1999年大会を踏襲し、学会固有セッションは設けず、全てのセッションを一律に公募とします。ただし、セッション間の調整を担当するプログラム委員を決める参考とするために、セッションの申し込み時に、そのセッションが主として関連する学会を、指定して頂きます(特に関連学会を指定しない

ことも可、この場合プログラム委員長が担当)。セッションの受け付け、個別の講演申し込みの受け付け、要旨集原稿の受け付け、参加申し込みの受け付け等、全ての作業をWEBで行います。詳細については合同大会ホームページに順次掲載予定です。なお、セッションの申し込み受付は9月16日から10月15日まで行う予定です。

要旨集は、1999年大会と同様に、冊子状のものは発行せずに、WEB上で合同大会の参加者以外にも無料で公開する予定です。配布物に関しては、1999年大会とは異なり、セッションの日程と会場に関する情報を記載した印刷物のみを各学会を通じて参加学会の全会員に配布し、プログラムの詳細を載せた印刷物とCD-ROM版の要旨集は、希望者のみに有料で配布する予定でいますので、予めご承知おください。

合同大会の会期中の、6月27日と28日はWPGMが同じ場所で平行して開催されます。このことがプログラム編成に様様な影響を与えることが考えられます。プログラム委員会としては、問題の発生が予測された時点で、それぞれの問題に対して柔軟に対応してゆくつもりですので、皆様のご理解とご協力を切にお願いいたします。

【4】情報化委員会からのお知らせ (情報化委員長; 関谷 実)

今年度も昨年度に引き続いてWWWを用いた各種登録や広報を行うことになりました。URLは

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

です。なお、以下の点にご留意下さい。

(1) セッションの公募について

今年度は、セッションの公募もホームページで行うことになりました。公募期間・方法などの詳しい情報は上記ホームページをご覧ください。

(2) 個人情報登録について

今年度も個人情報登録システムを運用します。初めて参加される方は最初に個人登録をお願いします。また、昨年度の登録データは今年度そのまま継続利用されます。昨年度の個人ID番号やパスワードを忘れた方は、ホ

ームページ上から問い合わせを行って下さい。詳しくは上記ホームページをご覧ください。

(3) SSLについて

昨年度と同様、各種登録ではSSLという暗号化システムを用います。これは第三者によるクレジットカードや個人情報などの盗用やデータの改変を防止するためです。SSLが使用できないシステムの方にはご迷惑をおかけしますが、やむを得ない処置ですのでご了承下さい。なお、各人のご利用のシステムでSSLが使用できるかどうかは上記ホームページ中の個人登録のページにおいて確認できます。

(4) コンピーナ・プログラム委員の方へのお願い

セッションのコンピーナーやプログラム委員の方は、SSLの利用ができるかどうか、早めの確認をお願いします。SSLの使用ができない場合は、かなりの支障が予想されます。利用できない場合は、SSLが利用できる大学またはインターネット・プロバイダーに利用登録をして、電話回線などで接続していただく必要があります。

【5】合同大会開催期間中の託児サービスについて (保育室実行委員会)

(省略)

連絡先:

海底下深部構造フロンティア

木戸ゆかり

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15

E-mail: kidoy@jamstec.go.jp

(地球惑星科学関連学会連絡会ニュース No. 18より抄録)

<補足> 合同大会の担当執行委員は行事委員長の公文です。また、地質学会からは、2000年合同大会の実行委員を九州大学理学部の坂井 卓氏と佐野弘好氏にお願いしています。必要なことがありましたら、ご相談下さい。

Western Pacific Geophysics Meeting (WPGM 2000) のお知らせ

WPGM組織委員長 入倉孝次郎
プログラム委員長 佐竹 健治

WPGM 2000 とは？

WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting) は、主に西太平洋地区を研究対象にしている地球物理学者のために、AGU (American Geophysical Union) が主催者となって、隔年に行われている大会です。

1990年に第1回が金沢で開催された後、香港、ブリスベン、台北と西太平洋地区で開催され、来年(2000年)は十年ぶりに日本へ戻ってきます。今回は、地球惑星科学関連学会連絡会に参加している各学会が共催となっておりますが、主催・共催団体への所属に関係なく、どなたでも参加できます。

WPGM 2000は合同大会と一部重なります

2000年大会は、平成12年6月27日(火)～6月30日(金)の4日間、国立オリンピック記念青少年総合センター(渋谷区代々木)で開催されます。このうち、前半の2日間は地球惑星科学関連学会合同大会と重なるため、会場を半分づつ使用します。

合同大会とWPGM

2000とは、運営・プログラム編成・会計など、すべて独立に行います。したがって、両方に参加するためにはそれぞれに登録する必要があります。

WPGM 2000までの日程

99年11月10日

特別セッション提案締め切り

00年3月16日

abstract締め切り(webを通じての場合;郵送の場合は3月9日)

00年5月12日

事前登録及び宿泊申し込み締め切り

さらに詳しい情報は、AGUのweb site (<http://earth.agu.org/meetings/wp00top.html>) をご覧ください。

特別セッションを募集しています

WPGMでは一般セッションに加えて多数

の特別セッションを設けます。特別セッションのテーマは公募します。申込みの締め切りは平成11年11月10日(水)です。

特別セッションを申込みされる方は、以下の項目についてお知らせください。

- (1) 特別セッションの名称(英文)
 - (2) コンビナーの氏名・連絡先(電話番号・電子メールアドレス)
 - (3) 特別セッションの趣旨を記述した講演募集用の宣伝文(英文で50語程度)
- 申し込み先は下記のプログラム委員です。

プログラム委員

Co-Chairs

佐竹健治(地質調査所, 日本地震学会)
satake@gsgj.go.jp

Robert Wesson (U.S. Geological Survey)

A Atmospheric Sciences

住 明正(東京大学, 日本気象学会)
sumi@ccsr.u-tokyo.ac.jp

Malcolm Ko (Atmospheric and Environmental Research Inc.)

G Geodesy

福田洋一(京都大学, 日本測地学会)
fukuda@kugi.kyoto-u.ac.jp

Oscar L. Colombo (NASA Goddard Space Flight Center)

GP Geomagnetism and Paleomagnetism

綱川秀夫(東京工業大学, SGPSS)
htsuna@geo.titech.ac.jp
David J. Dunlop (Erindale College)

H Hydrology

鈴木裕一(立正大学, 日本水文学会)
ysuzuki@risgw.ris.ac.jp
Harry F. Lins (U.S. Geological Survey)

OS Ocean Sciences

久保田雅久(東海大学, 日本海洋学会)
kubota@mercury.oi.u-tokai.ac.jp
川崎穂高(地質調査所, 日本地球化学会)
kawahata@gsgj.go.jp

Julie McClean (Naval Postgraduate School)

P Planetary Sciences

並木則行(九州大学, 日本惑星科学会)
nori@geo.kyushu-u.ac.jp

S Seismology

谷岡勇市郎(気象研究所, 日本地震学会)
ytanioka@mri-jma.go.jp
山崎晴雄(東京都立大学, 第四紀学会)
yamazaki@comp.metro-u.ac.jp
Robert Wesson (U.S. Geological Survey)

SPA Solar Planetary and Aeronomy

早川 基(宇宙科学研究所, SGPSS)
hayakawa@stp.isas.ac.jp

Timothy J. Fuller-Rowell (ERI/SEL, NOAA)

T Tectonophysics

木村 学(東京大学, 日本地質学会)
gaku@geol.s.u-tokyo.ac.jp
松井正典(九州大学, 日本鉱物学会)
matsui@geo.kyushu-u.ac.jp
Kirk D. McIntosh (Univ. Texas, Austin)

V Volcanology, Geochemistry and Petrology

中田節也(東京大学, 日本火山学会)
nakada@eri.u-tokyo.ac.jp
大場 武(東工大, 日本地球化学会)
ohba@ksvo.titech.ac.jp
有馬 真(日本岩石鉱物鉱床学会)
arima@ed.ynu.ac.jp
Nobumichi Shimizu (Woods Hole Oceanographic Institution)

補足: 地質学会としては、組織委員を小松正幸会長(愛媛大・理)、実行委員を玉木賢策氏(東大・海洋研)、プログラム委員を木村 学氏(東大・理)、担当執行委員を磯崎行雄氏(東大・総合文化)をお願いして対応しています。より詳しいことが必要でしたら、これらの方々にご相談ください。

ご案内(追加)

地球観測衛星データを利用した研究公募のお知らせ

平成11年9月

【背景】

現在、宇宙開発事業団では、陸域観測技術に更に高度化し、地図作成、地域観測、災害状況把握、資源探査等への貢献を目指す陸域観測技術衛星 ALOS (Advanced Land Observing Satellite) の開発を進めております。ALOSは、標高や土地被覆情報を抽出す

るPRISM及びAVNIR-2、並びに昼夜、天候を問わず観測が可能なPALSARの3つの地球観測センサを搭載し、高分解能観測に威力を発揮することが期待されています。地球観測データ解析研究センターでは、2002年の打上げに先立ち、衛星データを利用した研究公募を実施することになりました。

【内容】

ALOSデータの利用を希望する国内・海外の教育機関、研究機関及び民間企業等の研究者を対象に、(1)校正検証、(2)利用化研究、(3)科学研究、の3つの項目について研究提案を募集します。研究提案書の提出要領等の詳細

情報は、ホームページ (<http://www.eorc.nasda.go.jp/ALOS/>) にて平成11年10月頃公開の予定です。

【募集期限】

1999年12月31日(予定)

【連絡先】

〒106-0032 東京都港区六本木1-9-9 六本木ファーストビル14F
宇宙開発事業団 地球観測データ解析研究センター ALOS研究公募事務局
電話 03-3224-7074 Fax 03-3224-7051
E-mail: aproject@eorc.nasda.go.jp

委員会だより

☆各賞検討委員会

1. 日本地質学会「各賞」の問題点と新しい各賞体系・素案の提案 (1998年度活動報告)

嶋本利彦(委員長, 文責)・板谷徹丸・木村 学・小泉 格・丸山茂徳

本委員会は1998年度第1回評議員会において「日本地質学会国際賞」の名称を再検討するために発足しましたが、同時に日本地質学会の各賞にまつわる全般的な問題点を整理・検討して、新しい賞体系の素案を提示することを依頼されました。本委員会では、評議員会での意見を聞きながら1年間をかけて各賞の問題点を整理し、本年3月の評議員会に新しい各賞体系の素案を提案しました。素案を作るに際しては、国際的視点から現行の各賞体系の問題点をまとめ、改革の基本方針を決めてから新しい賞体系の枠組みを作りました。各賞は学会の一つの顔であり、本委員会は新しい千年紀の前にして、地質学会の国際化を視野においた抜本的な改革案を模索しました。委員会の報告の骨子は今年のニュース誌5月号(23頁)に「各賞検討委員会報告」として掲載されております。ここでは現在の各賞体系の問題点をまとめ、新しい賞体系の枠組みを解説して、本委員会の最終報告とします。

1. 各賞にまつわる問題点

現在の各賞体系には、以下のような大きな問題があります。

(1) 学会誌中心の賞体系

地質学会賞以外は、地質学雑誌に掲載された論文に対する賞が基本となっている(奨励賞、小藤賞、論文賞)。最近 Island Arc 誌が追加されたが、このような状況は、国際誌だけでも数100の雑誌が出版され、会員の研究と活動が極めて多様化している現状に合わない。その結果、優れた研究をした会員が授賞対象から外れることが多かった。地質学雑誌がいまだに世界の地質学関係者が必読の雑誌になっていないことを考えると、授賞対象を地質学雑誌掲載論文に絞ることが、会誌の質の向上に貢献してきたとも言えない。

地質学雑誌掲載論文にこだわらないで、非常に優れた単独あるいは組織的研究、またはライフワーク的な研究等の重要性をもっと評価すべきである。学会誌掲載論文を対象とした賞は、一本化するべきである。

(2) 中間レベルの賞の欠如

最高レベルの賞(日本地質学会賞、「国際賞」とその他の賞の間にギャップがある。外国の成功している学会のように、若手研究者の賞、研究分野毎の高いレベルの賞、全分野を対象とした最高レベルの賞といった三重構造にするのが望ましい。

(3) 奨励賞と小藤賞の問題

奨励賞については上記(1)の問題があり、最も優れた研究をしている若手会員が授賞しているとは限らない。学会誌掲載論文だけを対象としないで、より総合的な評価が必要である。

論文の価値は長さでは決まらないので、短報にだけ小藤賞を出す理由がわからない。短報に納まらない速報もある。論文の長さによる賞区分をやめて、現在の論文賞と小藤賞をいっしょにした賞をもうけるべきである。

(4) 選考委員会と選考基準

選考委員会では委員の数も少なく、専門も限られている。委員長は研究分野を越えた公平な判断ができる人を選ぶべきである。明確な選考基準がない。選考に十分な情報が与えられていないので、委員の仕事が学会誌掲載論文を読むことになっている。

(5) 国際化

今後地質学会が世界の地質学界を少しでもリードしていくためには、「国際賞」以外の賞も外国の研究者に授与する方向に変えていくべきである。東アジア地域における地質学界への貢献にも配慮した賞の授与も考えるべきである。

(6) 社会への貢献

地質学の普及と発展への貢献、および一般社会の地質学への貢献をより評価するべきである。

2. 「賞体系」改革の基本路線

上記の問題点を認識して、本委員会では以下の基本路線を採用しました。

- (1) 国際的に成功している学会の例を参考にして、新世紀に向けた抜本的改革を行う。
- (2) 賞の数は実質上縮小する。
但し、学会が発展し、財政状況が劇的に改善されれば、その限りではない。
- (3) 選考委員会と選考基準を強化・整備する。
- (4) 地球環境問題の重点化、社会との関わりを強化：そのために、日本地質学会表彰、功労賞を拡大・強化する。

3. 賞体系の改定・案

本委員会は、以下の賞体系を提案します。これによって、上記の問題点と基本方針を満たすことができます。

- (1) 日本地質学会賞 (Geological Society of Japan Award) :
分野を越えた最高レベルの賞(会員を対象)
- (2) 「国際賞」
分野を越えた最高レベルの賞(非会員を対象)
- (3) 専門分野別のメダル：新設
 - (i) 各分野における最高レベルの賞、個人またはグループによる単独の研究、または個人のライフワーク的な研究を総合的に評価する。
 - (ii) 対象分野：当面、以下の4分野(魅力的な区分があれば変更)
 - ◆地層・古生物 ◆テクトニクス(広く解釈)
 - ◆地球・惑星物質科学 ◆地球環境・自然災害・応用地質
 - (iii) 名称は公募方式で決めるべき。高額寄付者の名称をメダルにつけてもよい。
 - (iv) 各々の賞が各年度に対象とする研究課題は、原則として1つに絞る。
 - (v) 会員・非会員を対象とする。財源がなければ当面は外国人には授与しない。
- (4) 小藤賞(論文賞と小藤賞は小藤賞に一括)
 - (i) 地質学雑誌(+Island Arc)掲載論文を対象とする。
 - (ii) 研究成果は遅れて評価されることがあるので、授賞対象を過去5年間に広げる。
 - (iii) 選考委員会は推薦のあった論文のみを比較検討する(委員からの推薦も可能)。
- (5) 奨励賞
 - (i) 35才以下の地質学会・会員を対象とする。
 - (ii) 研究目的および研究成果の全体を対象として選考する。
 - (iii) 外国の未調査地域ににかけて重要な研究をした人も、受賞対象者に加えるべき。
- (6) 優秀講演賞
廃止する(今までも出されていない)。奨励賞だけで十分と判断する。
- (7) 功労賞
 - (i) 長年の地道な調査研究を含めるように授賞対象を拡大する。
 - (ii) 地質学の発展に大きく貢献した新しい機器、システムなどの開発も授賞対象とする(民間会社も含む)。

- (iii) 出版を通じての地質学界への貢献も評価する。
 - (iv) 最近提案された「特別賞」は、「功労賞」との区別が不明確なので設けない。
- (8) 日本地質学会表彰
- (i) 賞の内容は現行通りでよいが、授賞対象を大幅に拡大する。
 - (ii) 賞状とメダルは出すが、旅費・賞金は当面出さない（出せない）。
 - (iii) 地方自治体、個人による博物館の充実、露頭の保全などは積極的に評価する。
 - (iv) 地質学の普及に貢献のあった個人・団体も積極的に評価
例：多数の地質学専門家を育てた教師、地質学学習プログラムの制作者、など。

4. 賞を出す頻度

以下のようにすると、実質上、各年度の賞の数は現行より3つ少なくなります。高レベルの賞は、3年に1度出すことによって賞のレベルが下がるのをふせぐことができます。また、対象とする研究は原則として1課題とするべきです。

- (1) 3年毎の賞
 - (i) 日本地質学会賞、「国際賞」[1年目]
 - (ii) 地層・古生物分野の賞、テクトニクス（広義）分野の賞[2年目]
 - (iii) 地球惑星物質科学分野の賞、環境・災害・応用地質分野の賞[3年目]
- (2) 毎年出せる賞
 - (i) 小藤賞、奨励賞、功労賞、日本地質学会表彰
 - (ii) 該当者がいない年があってもよい。

5. 選考委員会、推薦書類、選考基準

本委員会では、現在の選考委員会と選考方法についての問題点のリストを作り、以下のような改善案を作りました。選考委員会の強化、推薦書類の大幅充実、選考基準の整備と選考結果の評議員会での公開の4点が提案の骨子になっています。

- (1) 選考委員会
 - (i) 評議員会で決定。選考委員は必ずしも評議員である必要はない。
 - (ii) 委員長：分野にこだわらない、真に地球惑星科学の発展を思考し実行している見識者を選ぶべきである。
 - (iii) 委員数を増やして多くの専門分野をカバーする。
 - (iv) 国際賞の選考委員：既受賞者など、外国人識者も委員に加える。
 - (v) 任期：3年（一様な規準による選考をするためには、委員会が毎年変わるのはよくない。）
- (2) 推薦書類（他薦・自薦）
 - (i) 最低、科研申請書・学振特別研究員申請書くらいの長さの整備された情報が必要。
書類は、事務局と委員の数だけ応募者に提出してもらう（事務局の負担軽減）。
 - (ii) 推薦書類の内容と項目：以下の項目を含めて申請書を大幅に整備する。
被推薦者氏名・略歴と推薦者氏名（所属機関）
推薦理由：研究目的、成果とその重要性などを簡潔に！
この分野の国内・国外の研究の現状
研究成果の特徴と独創的な点
関連文献リストと該当論文または代表的論文
- (3) 選考方法と選考基準
 - (i) 推薦書類の大幅強化（推薦書類の内容の項参照）。
選考委員の仕事が地質学雑誌の論文を読むことであってはならない。
 - (ii) 選考委員による評価システムの確立。
採点をベースとするべき、採点結果は評議員会で公表。

- (iii) 各専門部会からの推薦に強く依存するべきではない。
専門部会の利益代表になると困る。研究成果に基づく絶対評価をするべき。
- (iv) 全ての賞において、国際的にみて新しい研究成果であることが授賞の条件。
Citation index も判断材料の一つに加える（とくに3年毎に授与する高レベルの賞）。
- (v) 選考委員会は、情報を十分に交換してからを開くべきである。委員各自が評価シートに記入してから委員会を開くのが効率的である。

6. 各賞の財源

会費のみに依存して学会が運営できる時代ではなくなりました。学会賞は、個々の研究者と地質学界の発展に対する期待料のようなものですから、寄付に相応しい予算項目といえます。本委員会は、各賞は原則として寄付を財源とするべきと考えます。そのためには、法人化をはじめとした寄付の受け入れの体制を整備する必要があります。学会が任意団体の場合には、寄付者は寄付と同額の税金を納める必要があるからです。AGUのように会費納入時に会員から寄付をもらう努力もするべきだと思います。

II. 「日本地質学会国際賞」の名称変更：経過と現状

国際賞の名称変更は、1998年12月19日の第3回定例評議員会で「都城賞」とすることが承認され、1999年3月26日の第106年総会に「評議員会議決事項」の承認を求める事項として提出されましたが、不承認となり、評議員会に差し戻しとなって今年度の委員会で新たに検討することになりました。この経緯と現状での取り組みを会員にお知らせするため、1998年各賞問題検討委員会報告から総会を経て新委員会設立と同委員会に付託した内容までの経緯と現状について、ご報告します。

また、今回の総会運営に際しては、春季に開催することの不具合（出席者が少ない）と会則の不備（議決権の委任が現実には合わないなど）が露呈しました。この点については会則細則等改正委員会での検討内容になりますので、ここでは割愛します。

1. 各賞問題検討委員会1998年度活動報告

嶋本利彦（委員長、文責）・板谷徹丸・木村 学・小泉 格・丸山茂徳

本委員会は1998年度第1回評議員会で発足し、(1)「日本地質学会国際賞」（以下「国際賞」と略記）の英文名称を含めた最終名称の提案および(2)日本地質学会の各賞にまつわる全般的な問題点を整理・検討して新しい賞体系の素案を提示することを依頼されました。「国際賞」は1997年度に設立され、1998年3月にW. G. Ernst氏が第1回「国際賞」を授賞しました。しかし、この賞が主に外国人研究者を対象としているにも関わらず、賞の英語名称が決まらないまま評議員会と総会で承認されていました。第1回受賞者が決まった頃に、招へいに必要な基金を集める各賞基金検討委員会（秋山雅彦委員長）に英語名称の検討が依頼されました。同委員会はThe Geological Society of Japan Medalを暫定案として提案し、正式名称が決まりしだい賞状を取り替えることを約束して第1回「国際賞」が授与されました。この名称が日本地質学会賞の名称（The Geological Society of Japan Award）と余りによく似ていることから、本委員会に名称の再検討が依頼されました。

本委員会では、学会賞の名称を広く調査し、国内・国外の方々に意見を聞き、評議員会での意見を参考にしてこの問題を検討しまし

た。既に「国際賞」が授与され、受賞者が正式名称を待っている状況を考え、全会員に意見を聞くため名称の公募を提案しました。名称の公募と選考基準は1998年6月の評議員会で承認され、公募記事はニュース誌8号に経過報告と選考基準を含めて掲載されました。応募は2件（都城賞とナウマン賞）でしたが、都城賞（Miyashiro Medal）が選考基準を満たしていることから、本委員会はこの名称を最終名称として提案し、1998年12月の評議員会で承認されました。

本報告では、これまでの経過をまとめ、評議員会の資料の一部と応募資料を掲載し、委員会報告とします。

(1)「国際賞」の名称について

名称の再検討は、各賞基金検討委員会において始まりました。「International」は本来「国家間の」という意味ですから、「国際賞」を“International Award”と訳すと意味不明になります。現在の日本語では、「国際」という言葉は、「世界の」とか“global”と同義語として使われているように思われますが、“Global Award”も英語として通じそうにありません。よく考えると、「国際賞」という言葉は、学会賞の名称として適切ではありません。「国際賞」は主に外国人を対象とした賞ですから、授賞する人が恥をかかないように、国際的感覚で名称を決める必要があります。

各賞基金検討委員会及び本委員会では、外国の賞の名称などを詳細に調査し、1998年6月の評議員会に資料として報告しました（その内容の一部は[資料1]として最後に添付）。調査の結果、地球科学をリードしている学会では、(1)ほとんどの場合賞の名称はその国が誇る研究者の名前をつけたメダルになっていること、(2)メダルは幅広い分野の研究者に授与されていること、(3)受賞者は多数の国にまたがっていること、(4)生存者の名前をつけたメダルもあることが明らかになりました。各賞基金検討委員会では日本人研究者の名前をつけたメダルが候補にあがりましたが、「国際賞」の名称変更を必要とするために、上述の暫定案を提案して、「国際賞」の名称は新委員会ですらに検討することを評議員会に答申しました。この提案が評議員会で了承されて本委員会の発足となりました。

(2)「国際賞」の名称の公募と選考経緯

本委員会では、国内・国外の方々からの意見も参考にして名称の委員会案をまとめました。しかし、学会会員から様々な意見がでることが予想されたこと、および「国際賞」が既に授与されている状況下で最終決定をむやみにのばせないことから、1998年6月の評議員会で名称を公募することを提案しました。公募の提案は、学会会員から広く意見を伺うことを最重要と考えたからです。この提案は評議員会で了承され、同時に次のような「名称選考の原則」も決まりました。応募があった後で選考基準を決めると混乱が予想されたからです。

人名をつけたメダルの場合：(i)地質科学の幅広い分野で国際的に大きなインパクトを与えた研究者名をつける（citation index もそのために判断材料とする）。(ii)日本地質学会の賞だから日本人の名称が望ましい。生存者が逝去者かは問わない。(iii)大口の寄付があれば寄付者の名前をつけたメダルも可能性として考える。

その他の名称を提案する場合：(i)日本地質学会賞の英文名称と区別が明確であること。(ii)補足説明がなくても国際的に通用する名称であること。

公募の案内は、経過説明、選考の原則も含めて地質学会・ニュース誌（1998年8月号）に掲載されました。名称公募と同時に、「国際賞」を含めた地質学会の各賞にまつわる意見を会員に伺いました。この公募によって、地質学会の全ての会員に国際賞の名称を提案する道が開かれました。委員会としては、応募の中から上記の選考の原則に従って選ぶこと、応募がなければ委員会案を採用するという方針をとりました。

公募の結果、磯崎行雄会員から都城賞（A. Miyashiro Medal）、植村 武会員からナウマン賞（Naumann Medal）の推薦がありました（添付の[資料2]参照）。どちらの応募においても、「国際賞」の名称は使われていませんでした。その他の名称の提案はなく、ま

た他に何の意見も寄せられませんでした。

ナウマン氏は日本の地質学の黎明期において大変重要な貢献をしましたが、世界の地球科学関係者のほとんどが知っているような仕事がありません。一方、[資料2]の推薦書類で指摘されているように、都城氏の変成帯の研究をはじめとした幅広い研究業績は分野を越えて世界の地球科学関係者に影響を与え知れわたっています。ちなみに、本委員会・委員が聞いた10名近い外国人研究者の誰もが推薦したのが、都城氏と和達清夫氏でした。

本委員会は、上記の選考の原則に従って都城賞（A. Miyashiro Medal）が「国際賞」の名称として相応しいと判断し、1998年12月の評議員会にその旨答申しました。同時に、日本語と英語の名称が全く違うと不便であること、上述のように「国際賞」は学会賞の名称として適切ではないことから、和文名称も「国際賞」から「都城賞」に変更することを提案しました。この提案は質疑応答の後に、同評議員会で投票の必要もなく承認されました。

「国際賞」は、新たな千年紀を迎えるにあたって、日本地質学会の国際化を推進するためにも、地質学会が地質科学の分野で経済大国に相応しい指導的役割をはたすためにも、学会の国際的な「顔」の一つになるべきものです。本稿で述べた報告が学会の国際化と発展につながることを期待します。

III. 第106年総会における国際賞（都城賞）不承認について

総会 議長：平野弘道、副議長：周藤賢治

評議員会は「1998年度各賞問題検討委員会の答申を審議し、従来の国際賞を都城賞と変更し、日本地質学会賞は会員を対象とし、都城賞は非会員を対象とすることとしました。また、これに伴って、運営細則第9条1と同7を改正したこと」を承認を求める事項のひとつとして提出しましたが、不承認となりました。ここではその総会での経緯を報告します。

総会では議題「承認を求める事項」として、小泉評議員会議長が評議員会議決事項の中で「国際賞」の名称変更について報告しました。それに対する質疑応答と評決に至る経緯はつぎのとおりです。

端山好和氏から「生存者の名前をつけるのはおかしいのではないか」との質問があり、各賞問題検討委員長（嶋本利彦氏）が委員会での調査結果に基づいてそのような例はあると答えました。角田史雄氏からは「もっと時間をかけて検討するべきではないか」という意見がだされ、嶋本利彦氏が「2つの委員会で検討を重ねてきていること、さらに全会員に名称提案の機会を与えるために公募をしたこと」を説明しました。

その後、地学団体研究会事務局の小林忠夫氏が、身分を述べつつ私見として、都城賞を評議員会に差し戻す緊急動議を提案しました。この提案に対して、吉田武義氏からは「都城賞にした根拠を明らかにして欲しい」、新妻信明氏と高橋正樹氏からは、「本件は総会の承認事項であって審議事項ではないので審議はできない、承認するかしないかのどちらかである」との意見が出され、議事は一時中断しました。

議長と執行委員会で協議した結果、規約に緊急動議の条項がないことを確認し、議長判断で「不承認理由の意見」と「それに対する反論」を述べてもらい多数決とすることとしました。不承認理由の意見としての小林氏の発言の骨子は、(1)都城秋穂氏は月刊地球、「地質学と地震」特集号（1992年号外No. 5）や岩波書店から最近出版された「科学革命とは何か」の著作などを通して、地学団体研究会を誹謗中傷してきた方である、(2)地質学会が都城氏の名を「国際賞」に冠することは、学会が同氏の発言を支持することになる、(3)したがって都城賞の名称が採用されれば、地質学会と地学団体研究会とが長年築いてきた友好関係が崩れることを危惧する、というものでした。それに対して、丸山茂徳氏から、「学会はお互いに競

い合い、しのぎを削ってこそ学問の健全な発展がある」という反論が述べられました。上記特集号についての状況説明として、嶋本利彦氏が「特集号は地質学会とは全く無関係であること」、および「わが国の地質学界においてプレート論の普及が遅れたことは学問の発展のためには大変切実な問題であり、特集号の内容が間違っているなら、なぜ出版社から提示された反論の特集号をうけなかったのか」という内容の発言をしました。

その後、議長裁決により、総会出席者数の過半数の賛成で名称変更が承認されるとして挙手による評決に移りました。

その結果、承認61票、不承認47票、態度保留16票となり、承認票が半数に1票満たなかったために、「国際賞」の名称変更は次年度の評議員会へ差し戻して継続審議されることになりました。

IV. 1999年度各賞問題検討委員会に付託した事項

評議員会議長 小泉 格

第2回定例評議員会（6月26日）では1999年度各賞問題検討委員会メンバーとして所属分野を考慮した7名を承認し、同委員会に付託する内容をつぎのように決め、各メンバーに連絡しました。新委員はつぎのとおり。秋葉文雄（民間企業）、府川宗雄（教師）、板谷徹丸（大学・前委員）、小出良幸（博物館）小川勇二郎（大学）、立石雅昭（大学）、渡部芳夫（研究機関）。

【経緯】

1998年度の各賞問題検討委員会は、国際賞の名称と日本地質学会「各賞」の問題点および各賞体系・素案について答申した。評議員会は答申された国際賞の名称を承認し、それ以外の各賞体系・素案等は継続審議にすることとした（ニュース誌5月号23p参照）。本年3月の総会で国際賞の名称「都城賞」が不承認となり、評議員会に差し戻しになった。

また、懸案となっている博物館関係と日本地質図体系（朝倉書店刊）編集委員会に対する賞は、「日本地質学会表彰」とする方向で1998年度各賞選考委員会で検討を行った。その結果、各賞問題検討委員会の答申を受けてから対応した方が良いとの判断から1998年度の賞は見送られた。1998年度各賞問題検討委員会嶋本委員長からは1999年度の各賞選考委員会にこれらの検討をお願いしたいとの意向が出された。（ニュース誌5月号23p参照）。

【評議員会に答申する事項】

1998年度に答申された内容は豊富で多岐にわたるため、これらすべてを単年度で検討することはむづかしい。このため1999年度の委員会では、緊急性と重要性から(1)総会で不承認となり差し戻された国際賞の名称を検討すること、(2)1998年度に保留になっていた博物館関係の賞を具体化すること、(3)同じく出版関係の賞を具体化することの3点に絞っての答申を依頼する。

以上

V. 資料

【資料1】学会賞の名称（各賞問題検討委員会・資料）

外国の主要学会を中心に、学会賞の名称を詳しく調査しました。以下、1998年6月の評議員会で配布された資料の一部を掲載します。

賞の名前には巨額な寄付をした人の名前の場合（ノーベル賞が代表例）と学問で名を挙げた人の場合がある。有名なノーベル賞・シュバイツァー賞・フィールズ賞、アメリカ地質学会のDay MedalやPenrose Medalは、基本的には前者である。Penrose氏は巨額の寄付者で、学問の業績はない。Day氏は晩年、カーネギー研究所の所長を勤めた研究者だが、退官後に有名な陶器会社の重役になり、その後で巨額の寄付をし

た方である。彼の生存中にこの賞が始まった。以上の2つの大きな賞（メダル：賞状と名前が刻印された金のメダル）の他に、アメリカ地質学会には以下のような賞がある（賞状のみ）。それらはほとんど、各分野毎の研究功労者の名前を使っている。

Young scientist award (Donath medalists), Ripp Rapp Archeological Geology Award (Formerly named the Archeological geology Division Award), Gilbert H. Cady Award (Coal Geology Division), E.B. Burwell, Jr Award (Engineering Geology Division), G.P. Woolard Award (Geophysics Division), History of Geology Award, O.E.Meinzer Award (Hydrology Division), G.K. Gilbert Medal (Planetary Geology Division), K. Bryan Award (Quaternary Geology & Geomorphology Division), Career Contribution Award (Structural Geology & Tectonics Division), Distinguished Service Award

アメリカ地球物理連合でも、Bowie Medal, Ewing Medal など、ほとんどの賞は各分野毎の著名な研究者の名前を使っている（詳細はAGU Directoryを参照）。カナダ地質学会の最高の賞はLogan Medal (1964年に設立)で、他にGAC Past Presidents Medal, GAC Medal, E.R. Ward Neale Medal, J. Wills Ambrose Medalがある。ロンドン地質学会はLyell Medal, Marchison Medal, ジッグスビーメダル、ウラストンメダルがあり、100年余りの歴史がある。最近はアワードとして30～35の分野別の賞を出しており、奨励賞では賞状と少額の賞金が授与されている。ベルギー地質学会ではフルマリエメダル（構造地質学者の名前を冠している）が最高のもので、金のメダル（人名の刻印）と賞状が授与される。ロシア科学アカデミーでも人名を使ったスベリディアロフ賞がある（賞状のみ）。

賞の名称と受賞者の専門分野についても詳しく調べた。アメリカ地質学会が授与したPenrose Medalistsの専門分野は多様であり（地域地質学・堆積学・構造地質学・海洋地質学・岩石学・地球物理学・古生物など）、アメリカ以外の国の研究者も数多く受賞している（フランス・スウェーデン・ノルウェー・スイス・英国・ドイツ等）。Day Medalistsも専門分野は多様で、岩石学・地球物理学・宇宙化学・地球化学・構造地質学・惑星科学・地域地質学の分野にわたっている（出身国はアメリカ・英国・フランス・カナダ・オーストラリア・日本）。他の諸国（英国・カナダ・ベルギー・旧ソ連など）にも同様の傾向が認められる。

国際的に成功している学会の賞には、次のような共通した特徴が認められる。(1)その国の誇る著名な研究者の名前を冠したメダルが圧倒的に多い、(2)学会最高のメダルの研究者と受賞者の専門には関係がない、(3)学会最高の賞の受賞者は多くの専門分野と国にまたがっている、(4)学会会員以外にも賞を与えている、(5)Day Medal, 林賞（惑星科学、京都国際賞の賞金を基金にした賞）のように生存者の名称をつけたメダルもかなりある。

【資料2】「国際賞」名称の応募資料（受領順、原文通り）

応募資料には、論文リストと略歴が添付されていましたが、頁数の関係上割愛します。未掲載部分を見たい方は、学会事務局まで問い合わせ下さい。

1. 都城賞, A. Miyashiro Medal (推薦者、磯崎行雄会員)

候補者名：都城秋穂（ニューヨーク州立大学名誉教授）

推薦理由

都城秋穂氏は変成岩岩石学、海洋底の岩石学、造山運動論など多彩な分野における研究を通して世界の地質学の発展に大きく貢献した。国の内外を問わないその業績の高さゆえに、設立以来100有余年の歴史をもつ日本地質学会の歴代会員のなかで、世界的知名度が最も高い研究者である。日本地質学会が世界的業績を成し遂げた研究者を対象に授与する「国際賞」の場合、受賞者自身が名誉と感ずる名称であることが望ましい。別項に記すように、都城氏は世界の地質学界にあって、日本人地質学者としては突出した知名度をもつことから、彼の名前は日本地質学会の「国際賞」に冠する個人名として最もふさわしいといえる。以上の理由からA. Miyashiro Medalという英文名称をここに提案する。また和文名称もこれに準じて都城メダルとすることを提案する。

主要研究実績

都城秋穂氏の研究は、鉱物学から始まり、やがてそれは物理学および

化学的知識の裏付けをもった近代的な変成岩岩石学へと発展し、1960年代初頭には「変成相系列」という広く世界中で知られる重要な概念に結実した。これまでの地質学史のなかで、日本人が提案した新しい概念がこれほどまでに広く世界に受け入れられた例は皆無である。このアイデアを提唱した1961年の論文は、その後の研究者による引用頻度が異常に高く、科学論文の引用数統計を研究しているThackray (1986)によってContemporary Classics (現代の古典) の一つに選ばれている。またこのアイデアとそれに基づく「対の変成帯」モデルは、諸外国の地球科学者を大いに啓発し、1960年代半ばのプレートテクトニクス理論の確立を導く礎石の一つとなり、地球史的視野からの地殻進化史研究の先鞭をつけた。そういった意味で、都城氏は、地球物理学分野を含めても、プレートテクトニクスの構築に最も貢献した日本人地球科学者といえる。また、海洋底を構成する火成岩・変成岩についての研究を進め、1970年代の有名なオフィオライトの起源論争では、海嶺起源論に固まった諸外国の岩石学者達に対して島弧起源の例の存在を掲げて反論し、最終的には彼らを論破した。さらに1980年代には、マイクロプレートの評価、今日のマントルブルーム説に繋がるホットリージョン説などをはじめとして、さまざまなテクトニクスや造山運動論の問題について研究を進めた。

これらの業績の偉大さは、次のような数々の国際的な受賞歴という形からもうかがえる。アメリカ地質学会のArther L. Day Medal (1977)、ベルギー王立科学アカデミーのPaul Fourmarier Medal (1981)、インドのアジア学会のP. Bose Memorial Medal (1985)、そして万国地質学会のL.A. Spendiarov Prize (1992)の受賞に加えて、アメリカ鉱物学会終身フェロウ (1970から)、ロンドン地質学会の名誉フェロウ (1971から)、フランス地質学会の名誉会員 (1976から)、およびアメリカ地質学会の終身フェロウ (1977から) に指名されている。

上記の研究者としての輝かしい側面に加えて、優れた和文・英文教科書の著作を通して後進の育成に努めたことの貢献は極めて大きい。「変成岩と変成帯」(1965, 岩波書店)、“Metamorphic rocks and metamorphic belts” (1973, Allen & Unwin)、「岩石学 I-III」(1972, 1975, 1977 共立出版)、鉱物学 (1975, 岩波書店)、「地球科学講座12, 造山運動」(1979, 岩波書店)、「同16, 世界の地質」(1979, 岩波書店)、「Orogeny」(1982, Wiley)、「変成作用」(1994, 岩波書店)、“Metamorphic petrology” (1994, UCL) などがその例である。また地質学あるいは地球科学がもつ学問的特性に注目し、1960年代そして1990年代に二度にわたって地球科学の歴史を科学史的観点から整理した。それらは各々「地球科学の歴史と現状」(1965-1966, 雑誌「自然」連載) および「科学革命とは何か」(1998, 岩波書店) という二つの著作として残されている。我が国の地球科学界には類書は見当たらず、日本の研究者コミュニティにとっては貴重な財産となった。

2. ナウマン賞, Naumann Medal (推薦者; 樫村 武会員)

候補者名: ナウマン (Heinrich Edmund Naumann, 東京大学理学部地質学・探鉱学科, 初代教授)

提案理由

ナウマンが、若干20才にして地質学黎明期の日本に迎えられ、近代的な地質学を日本に導入して滞日10年の間に、日本の地質学・古生物学・地体構造論などの重要な基礎を創り上げていったことは、よく語られるところである。にもかかわらず、彼の独創的な諸論文や著書に接する人は稀であり、そのためか、あるいは他の理由によるのか、彼と彼の業績に対する評価は永らく伝説的雰囲気包まれていた観がなきにしも

あらずであった。一昨年、彼の著作16編が、故 山下 昇氏によって原著から直接、翻訳出版された。それらに目を通して見るならば、何人も、彼の業績が国際的にも独創的なものであり、その活動が日本における近代地質学の誕生とその後の発展にとって欠くべからざるものであって、比類のない偉大な貢献であったことを疑う者はいないであろう。

ナウマンこそは、日本の近代地質学にとって最初にして最大の貢献者であり、百有余年の時を超えてその亡霊を霧の彼方から陽光の下に迎え、最高級の賛辞をもって再評価することは、日本地質学会の義務であると同時に、他の何人にも譲ることのできない権利でもある。このたび、日本地質学会賞と並ぶ最高の賞として制定された「国際賞」の名称を議するにあたり、その名をとるに最もふさわしいものとして、エドムント・ナウマンの名を推すゆえんである。

ナウマンは外国人であるとはいえ、その名はフォッサマグナの名称とともに、あまねく日本の地質家にとって親しみ深いものであろう。また外国人受賞者に対しては、ナウマンと日本地質学の関係を説明し、その名と姿を刻して永遠に彼を顕彰するメダルの授与によって受賞者の功績を讃えるならば、受賞者の喜びこれに過ぐるものはないと確信する次第である。

主要研究実績

1854年, ドイツ・ザクセン王国, 陶磁器で有名なマイセン市に生まれ、ミュンヘン大学で地質学を学ぶ。

1874年, 学位取得後、日本政府から東京大学的前身、東京開成学校の鉱山学科に招聘される。

1875年 (明治8年) 来日時に、鉱山学科が廃止されていたため、金石取調所で和田維四郎とともに鉱物調査を担当。

1877年 (明治10年)、東京大学の開学に伴い、日本最初の地質学探鉱学科教授となり、多くの後進を育成。

1878年 (明治11年)、日本政府に建言して内務省地理局に地質課 (現地質調査所的前身) を開設。

1879年 (明治12年)、上記の地質課に転任。

以後、帰国までの間に、全国の地質調査計画を立案・実施。自ら東北、関東、四国地方をはじめ、各地を踏査し、独創的な多くの論文を著す。近代地質学の導入、地質調査事業の開始に多大な功績を上げる。

1885年 (明治18年) 帰国。この年、ベルリンで開催された万国地質学会議で自ら指導調査した日本の地質をまとめ、「日本群島の構造と起源について」を出版。

1887年、中央日本を横断する大きな溝状地帯を「フォッサマグナ」と命名。本州を縦走する「中央割れ目帯 (西南日本の部分はのちの中央構造線)」により、内帯・外帯を区分。

ナウマンはその後も1890年代にいたるまで、日本の地質に関するいくつかの論文を発表している。日本の地体構造の基本的枠組みに関する研究は、以後、原田一ナウマン論争など、この分野の研究に大きな影響を残すこととなった。また、日本産の旧象化石についてまとめた研究があり、そのうちの一種はのちに横山又次郎によりナウマン象と命名された。そのほか、後記の「各論文の要旨」に述べるように、火山、地震、平野、河川などの分野に関する多くの研究があり、とくに過去のいくつかの地震の震央の決定、マグニチュードに相当する9段階の強度階の提唱は、Ewingによるマグニチュード概念の提案に先立つこと2年であったが、日本と世界の学会でほとんど完全に無視されてきたという。若干23才の青年地質家の輝かしい研究業績として再評価するべきであろう。



会員の声

「日本地質学会国際賞」の名称問題が提示したこと

嶋本利彦（京都大学大学院理学研究科）

「日本地質学会国際賞」（以下「国際賞」と略記）は1997年度に設立されましたが、英文名称が決まっていなかったこと、「国際賞」が学会賞の名称として必ずしも適切ではなかったことから、各賞基金検討委員会（1997年度）および各賞問題検討委員会（1998年度）において英文名称も含めた「国際賞」の最終名称が検討されました（本誌の【「日本地質学会国際賞」の名称変更：経過と現状」の記事を参照）。地質学会・評議員会は、「国際賞」の設立後2年間を費やして両委員会の報告内容を討議し、地質学会会員に名称の公募をおこなって、「国際賞」を「都城賞（A. Miyashiro Medal）」に変更することを決定し、1999年3月の総会において名称変更の承認を諮りました。しかしこの名称提案に対して、地学団体研究会事務局の小林忠夫氏が、「地学団体研究会と地質学会の今後の友好関係が危惧される」という理由から名称決定を評議員会に差し戻す緊急動議を提案し、ほとんど議論の時間がないまま投票がおこなわれて、1票の不足で「国際賞」の新しい名称は決まりませんでした。

緊急動議の理由には大きな問題があるばかりでなく、今回の事態は、「地質学会・総会」の問題点をも浮き彫りにしました。私は各賞基金検討委員会・委員および各賞検討委員会・委員長として、このたびの名称改訂に関わってきました。今回の事態は、学会の現状に大きな失意を抱かせるとともに、学会の将来にも不安を覚えさせるものでした。本稿では、「国際賞」の名称問題が提示した問題点についてまとめ、会員各位の公平な判断をお願いしたいと思います。

本稿の約8割は、各賞検討委員会（委員：板谷徹丸・木村 学・小泉 格・丸山茂徳）の報告として同委員会がまとめたものです。原文とキーワードの多くは、私によるものではありません。しかし、執行委員会から「本稿の内容を委員会報告としてニュース誌に掲載することはできない」という連絡を受けました。納得できる結論ではありませんが、なるべく早く会員に現状を知っていただく方が重要と判断し、私個人の立場から本稿を報告させていただきます。なお、項目1の後半と最後の項目は、この度、私が追加したものです。

1. 学会会員の言論の自由

各賞検討委員会としては大変残念な結末になりましたが、今回の事態は学会存立の基本である「学問の自由と学会の中立性」をおびやかす危惧を感じます。今回のような動議が認められ、ある団体また人を批判した会員が

学会の名誉から排除されるならば、学会会員の自由な発言と行動は大きく制約されることになります。このような決定が繰り返されるなら、学会の将来に危惧を抱かざるを得ません。地質学会の最高の賞である地質学会賞は、プレートテクトニクスに一貫して反対してきた人にも授与されましたが、だからと言って地質学会が反プレート論を容認したことには決してなりません。本来、学会が特定の個人またはグループを組織をあげて支持したり排除したりすることはあってはならないことです。

小林氏が言及した特集号「プレートテクトニクスが成立した頃」（月刊地球、1992年号外No. 5）は、プレート論の変革がどのように生まれ、日本の地質学界にどのように受け入れられていったかを、この変革を身をもって体験した人達に語ってもらうために計画しました。この特集はもともと私が企画したもので、出版社も企画には関わっていません（まして地質学会は無関係）。この特集の中で、都城氏は、プレート論反対運動を、戦後の正統派遺伝学反対運動、地質学における物理的・化学的研究手法に対する反対運動、プレート論反対運動という一連の流れの中で論じました。そもそもこの特集で取り上げた問題は、単なる「誹謗中傷」で片づけられる問題ではありません。プレート論の普及が学問以外の要因で妨げられたとしたら、地質学界の発展のためにも大変重要です。学術誌上で指摘された問題は、学術誌上で反論してこそ、学問の建設的な発展があります。しかし、出版社から提案があったにも関わらず、上記特集号に反対する特集が組まれることはありませんでした。

2. 公募の重み

各賞検討委員会は、「都城賞」の提案を陰でこっそりと準備したわけでは決してありません。各賞基金検討委員会設立後は、「国際賞」名称は全ての評議員会で討議されました。「都城賞」に賛否両論があることは当然予想しておりましたし、公募することが決まった評議員会（1998年6月）では、「都城賞が各賞検討委員会では有力候補になっている」ことを口頭で報告しました。これは、暗に公募で対抗案を出してほしいという要請をしたものでした。そして最終的な名称は委員会内部で決めるのではなく、公募の中から選考の原則に基づいて決める方針を決めました。公募する以上、それは当然のことでした。都城賞以外の案が何故1件しか応募されなかったのか、実に不思議に思います。

公募締切を過ぎてからつい最近まで、「国

際賞」についての意見が公式・非公式にだされています。公募はニュース誌を通じて全会員に配布され、選考基準も含めて反対意見も寄せていただくことをお願いしました。応募締切が終わり、委員会の提案が評議員会で承認された後の意見は、委員会としては時間的にも手続的にも取り上げることはできませんでした。例えば大学で公募人事をおこなって、人事が学部で承認された後で別の推薦があれば、選考を再度やりなおせるでしょうか。今回の公募は評議員会が決めた名称決定のルールであり、締切を過ぎて出された意見を取り上げる必要があるならば、今後どれだけ時間をかけても学会の重要決定はできないことになります。評議員会では、このような名称決定のルールを再確認して、今後「国際賞」の名称の検討をしていただけるよう切望します。

3. 総会のあり方と今後の課題

今回の事態は、現在の総会のありかたに対しても大きな疑問を投げかけました。会計年度の関係で仕方がないとはいえ、春の総会にはたかだか100名余りの会員しか参加しません。参加者数以上に問題なのは、十分な資料の配布もなく、また審議の時間がほとんどとれない状況で重要な決定がなされることです。全ての行事を含めて1時間余りの短時間で総会は終了するからです。今回のように、関連資料の配布も十分な議論もないままに重要裁決がなされるとしたら、会員は十分な判断材料を得た上での判断ができませんし、春の総会では多くの会員の意向を反映した決定にもなりません。(1)総会の時間を長くして討議の時間を確保する、(2)より多くの会員が参加できる秋に総会を開催する、(3)重要決定事項は評議員選挙の時に全会員の直接投票にかける（次項で提案）、ことなどを真剣に検討する必要があると思います。

4. 重要案件の会員直接投票

私は、1995年以降、地質学会の評議員を4年間、執行委員を2年間つとめさせていただきました。限られた経験ですが、一部会員の反対があるだけで重要決定ができない学会の構造上の問題を痛感しました。法人化、学会の組織改革の議論に代表されるように、重要事項が提案されると、しばしば会員から執行委員会または評議員会に質問状が寄せられます。懸案事項についての具体的なかつ建設的な提案がない場合でも、執行委員会・評議員会では質問状への対応に多くの時間をさくこととなります。その結果、反対が予想される重要案件は対案を比較検討して内容のある審議をすることもなく、長期間審議状態のまま、

委員会から委員会に継承されることとなります。法人化の問題でも、地質学会は約10年間の検討を経てなお学会の基本姿勢すら決まっていないように私には見えます。阪神・淡路大震災後に法人化の検討を始めた地質学会では、既に法人化のための寄付集めの最終段階に入っています。両学会に関わっていた私には、この差は、重要事項を十分に審議しているかどうかではなく、学会として社会が要求している問題に本気で取り組む気があるかどうかの違いに思えます。「国際賞」の名称案は、ともかくも総会に諮られるところまでいきましたが、多くの重要案件は総会までたどりつけないのです。

対立した意見がでるのは学会としては健全な状態ですし、個々の意見が尊重されなければならないこともわかります。その一方で、約5,000名の地質学会会員から反対意見がなくなるまで学会決定を待つならば、重要案

件の決定は実質上できません。また、反対意見が多く会員の意見を反映しているとは限りません。意見が出尽くした段階で個々の案を体系的にまとめ、重要案件については全会員に投票の形で賛否を問うのがもっとも会員の意向を反映した決定方法であると思います。そのような決定は、既に会長・副会長・評議員選挙でおこなわれていますので、同時にやれば経費も手間もそれほどかからないはずで、ニュース誌の刊行によって、必要な情報を全会員に伝えることも容易になりました。学会のホームページの利用も可能です。

地質学会が機動力を得るためにも、「重要案件の会員直接投票」の導入を提案したいと思います。暗礁に乗り上げた「国際賞」の名称問題も、会員の直接投票に仰ぐのが、多くの会員が納得する決定になると私は思います。

「国際賞」は、新たな千年紀を迎えるにあたって、日本地質学会の国際化を推進するためにも、地質学会が地質科学の分野で経済大国に相応しい指導的役割をはたすためにも、学会の国際的な「顔」の一つになるべきものです。会員各位には、本稿で述べた問題を認識し、学会の国際化と発展につながる冷静な決定をしてほしいと思います。評議員会には、本稿で指摘した「会員の言論と活動の自由の保障」、「総会の問題」、「学会の構造上の問題」を放置しないでほしいと思います。また、都城賞・案は評議員会に差し戻されましたが、名称として否定されたわけではありません。評議員会における「国際賞」の名称決定の手続きに、どのような問題があったかについてもぜひ検討していただきたいと思います。昨年度の決定方法の問題点をまとめない限り、再度同じ結末をまねく可能性があるからです。

☆地質基準委員会

「第一次地質基準案」に関する(社)全国地質調査業協会連合会の見解

地質基準委員会において、策定に向けて検討を進めている「第一次地質基準案」について、関係協会との意見交換を計るため、1998年11月30日、深田地質研究所において全国地質調査業協会連合会および建設コンサルタント協会との「地質基準懇談会」が開催され、内容の説明と今後の進め方について懇談が行われた。懇談会の席上では、「地質基準」に対して「なぜ地質学会が」という意外さに基づく否定的な意見も出されたが、多くの肯定的な意見も出され、「地質基準」の策定に携った本委員会は意を強くするとともに純学術団体である地質学会の果たすべき役割を再認識した。

その後、全国地質調査業協会連合会は技術委員会においてさらに内容の検討を進められ、1999年5月10日付けで、その結果をとりまとめた見解を第一次地質基準策定委員会（現地質基準委員会）に寄せていただいた。その中で、「地質基準」について指摘されている性能基準として不徹底な点やランク付け、そして全体の統一については、2001年1月1日の発効を目指し本委員会で集中的に検討を進めており、その成果は1999年10月の名古屋年会において公表、全国地質調査業協会連合会・建設コンサルタント協会との再度の懇談会を経て、1999年12月の評議員会に最終案を提出する予定である。また、地質学会の役割についての貴重なご意見は、今後の地質学会の進む方向を検討するために大変参考になるので、ここに紹介する次第である。このような機会が更なる協力関係発展の契機となることが期待される。貴重な見解をお送り下さった全国地質調査業協会連合会にお礼を申し上げる。

（地質基準委員会 新妻信明）

日本地質学会

第一次地質基準策定委員会 殿

平成11年5月10日

社団法人全国地質調査業協会連合会
技術委員会

平成10年11月28日（土）に説明いただきました第一次地質基準案につきまして、社団法人全国地質調査業協会連合会技術委員会で検討した結果、下記の通り見解をとりまとめましたのでご通知申し上げます。

記

1. 「地質基準」策定の趣旨・目的について

「地質基準」策定の目的の中に「土木、災害、環境、資源調査における地質学的調査の役割や理解を明確にする」あるいは「地質学の発展を目指す」等、我々エンジニアリングジオロジストに対して社会的地位の向上を目指す内容が記してある点において、その趣旨

に対して共感するところも多々あります。また、近年における地質学の発展が土木や災害、環境分野における地質調査に取り入れ、応用地質学の発展を願っていることも共通した目的と考えられます。

しかしながら、調査の発注・受注側双方に調査の到達度と調査の質を保証する「地質基準」を策定するとなると、多面的かつ厳密な検討が必要になると思います。受発注の面からも、受注者側である全地連の立場だけではなく、発注側である建設省、運輸省、農林水産省他多くの発注機関の理解と協力がなければ成し遂げられません。また、学会レベルにおきましても日本応用地質学会、地盤工学会、土木学会等の理解と協力が必要だと思います。その意味において、この度の提案では、これらの発注機関や学会との協力関係をどのように形成して行くかの道筋が極めて曖昧であります。今まで応用地質に対してそれほど関与してこなかった日本地質学会のみで各発注機関や各学会の理解と協力を得ることは極めて難しいと思われる。

また、策定される「地質基準」は地質調査の基準を目指していることから、なぜその基準が必要なのかをデータに基づいて明確にするとともに、それが地質調査の一つの規格になることになるためには、品質保証の方法や責任のあり方およびそれにかかる経費も明確にしなければならないと思いますが、本基準ではその点が不十分で、

性能基準であるとの名の下に地質調査の地質学的理解のみに焦点を当てた内容になっているように思います。その点で、実際に地質調査を実施しているコンサルタントの立場や発注実態を踏まえた議論が欠けているように思います。

したがって、今のような考え方で日本地質学会が「地質基準」を策定しても、基準そのものが機能せず絵に描いた餅となる恐れがあると考えます。全地連としては、「地質基準」を策定するのであれば、関係者の理解と協力を前提にしたより広範な議論の積み重ねが必要と考えます。このため、日本地質学会のご努力には敬意を表しますが、この案件に限っては、一度、出発点に立ち戻って議論すべきと考えます。その中で、全地連として果たすべき役割があれば、全力を挙げて取り組みたいと思います。

2. 地質基準（案）について

1) 地質基準（案）の名称について

地質基準のコンセプトは、「異なる地質体を調査する場合、その地質体の起源からくる特徴に適した成果を得る基準を示したもの」と言うことにあると考えられます。したがって、地質基準と言うよりも「地質学的調査における成果のレベルとその解説」という方が内容に合致していると考えられます。

2) 地質基準（案）の不統一

前述のような名称にしても、策定された基準の中に調査成果のランク付けと精度のランクと調査方法のランクが不統一に混合され、何を旨とした基準なのか明確でなく、基準に一貫性が欠けていると思います。

3) 精度の問題と調査手段のランクについて

今回の基準が土木地質の分野にも入り込んでいるところがありますが、精度の問題を数十cmあるいは数cmの精度等のスケールで表示されていますが、幾ら露頭やボーリングコアを精度よく観察しても、全体をそのような精度で成果をあげることは不可能だと思います。また、数十mの精度においても地質構造を判断するのに露頭やコアの細かな観察が必要であります。また、付加体の地質においてもメランジェ中のクラストがどのような間隔や大きさで分布するか、現在の技術では困難です。すなわち精度をコントロール出来るような現状ではないはずです。どのような地質の場合にどのような間隔でボーリングなり物理探査を実施すると、どのような精度の成果を得られるのかと言うことは、地質調査をやっているものの今後の大きな課題であると考えられます。

また、調査手段がA～Dのランクで示されていますが、調査手段はそれぞれの長所欠点を有しており、ランク分けできるものではありません。土木地質分野でいうと対象によってはA～Dすべてが必要な成果を得るための最小限の調査であるということもあると思われます。その場合には、単に調査順序を表しているにしか過ぎないものです。

4) ランク分けについて

エンジニアリングの立場から見ると、トンネルやダムあるいは斜面防災、地震防災、環境等といった対象毎に要求される精度や成果が異なる場合が一般的であります。地質調査の進め方においては、極めて概略的な調査から精密な調査へと段階的に問題点を徐々に明らかにしながら進めていくべき性格を有しております。地質調査のランク分けには、上記のような観点からランク付けをしていかなければ、エンジニアリングにおける実際の調査に使用できないものと考えられます。

そして、各々の段階においてどのような調査手段を使うかを決めたり、地質構造を解釈したり、考察を加えたりするところは、個々の技術者の判断であり、生き甲斐でもあります。そこに基準や規格なりの強制力が加わると、技術者の意欲向上や技術の進歩にとって逆効果を生む可能性を持っていることを十分に考慮する必要があると思います。

日本道路公団の調査仕様書では、個々の調査段階に応じて技術提案をするような方法で、技術者の裁量が活かされる形になっており、

一つの方法であろうかと思われま

す。以上の観点から、地質基準策定委員会が示された第一次地質基準は、未成熟な基準であり、目指している発注側・受注側双方が認められるような基準には成っておらず、これを成案にすることには問題が多すぎると思います。

3. 総括的意見

日本地質学会はアカデミックな立場に立って地質学の理解を社会的に広め、基礎教育から専門技術の教育、地質技術者の社会的地位の向上を目指すことが使命と考えます。我々全地連は日本応用地質学会とも連携を図りながら応用地質学の分野の進展にいさかなりと貢献してきたと自負しております。そのことを考えると、日本地質学会が応用地質学的な側面が強い「地質基準」を今の時期に何故策定するかは極めて疑問であります。我々が日本地質学会に期待しているのは、むしろ、地質学的調査の教育、地質情報およびデータの記載方法や分析・鑑定等の基準統一化、地質学的調査業務の拡大等であります。

1) 地質学的調査の教育

「地質基準」が社会に認められるためには、発注側および一般社会の地質に対する理解の向上、および地質調査に携わる我々地質技術者の専門能力を前述の各学会や全地連が共同で向上させる必要があります。

土木地質調査、災害調査、環境調査を主要な業務領域とする全地連において地質調査の最終目的は対象となる土木構造物や斜面等の地盤を評価して安全で経済的な構造物の設計及び施工に役立てることや災害を予測して被害を最小限に防ぐことにあります。地質学的調査の成果は、それらを求めるための必要不可欠なバックグラウンドであり重要な情報と考えられます。しかしながら近年の地質学の進歩における知識や経験を十分生かしているとは言えないことも事実であります。年輩の技術者は、知識としては把握できても現場において若い技術者を指導できる程熟練している状況ではないし、また、卒業してくる学生も極めて専門化し地表地質踏査そのものが出来ないケースが数多く認められます。企業では基礎的で実践的な地質学の能力を如何に向上させるかが最も苦慮しているところであります。このような状態では、せっかくの有効な地質学的調査が発注側に理解してもらうことが出来ないことになり、基準を策定しても意味のないものになってしまうと思います。したがって、地質技術者の技術向上のために各学会および全地連等が共同で教育システムを構築することが望まれます。

2) 地質情報およびデータの基準統一化

工事によって新たに生ずる地質学的に有用な路頭が法面保護工によって消滅したり、膨大な量のボーリングデータや探査のデータ等の調査資料が研究者に入手出来なくて学問的に埋もれてしまっている。あるいは、他の発注機関が実施した同じ調査区域における調査資料が入手出来ない等の縦割り行政の弊害等を克服し、地質調査結果を公開し誰もが共有できるシステムを構築することも重要と考えます。その時にこそ、露頭観察やコア観察の記載の方法および分析や鑑定における基準を策定することが重要になると思います。

また、地質学的調査を行ったプロジェクト（例えば関西空港における地質調査等）の実例を収集し、地質学的調査が工学的にどの様に役立ったのかをわかりやすくまとめて社会的に示すことも重要と考えます。

3) 地質学的業務の拡大

また、日本は世界有数の災害立国であります。阪神大震災や台風による河川や斜面災害等これらを抑制していかに安全で住み良い環境を構築するかは、各学会のみならず行政においても重要な政策課題であります。そのような観点で日本地質学会、日本応用地質学会、全地連等が共同で地質学的調査の重要性を社会に示し、地質調査の業務を拡大していくことも地質学の理解や地質技術者の教育にとって重要な要素であると考えます。

阪神大震災直後の各学会は、縦割り行政をそのまま持ち込んだよ

うな行動をとっていたという事実があります。それぞれ共通なものを対象にしているのですから共同で行うことがもっと良いものが出るはずであるにもかかわらず、力の分散と不統一な成果を生み出した部分が相当あったことは否めません。

その反省の意味において、「地質基準」の策定というような作業は、一つの学会で成熟するようなものでないと思われます。基準の策定には、いろんな意味で社会的に利害関係や不協和音が伴ってく

るのが常であります。このような基準策定業務や教育、情報統一、業務の拡大等を成功させるには、日本地質学会のみではなく日本応用地質学会、全地連等と共同で策定し、多くの発注機関の理解と協力を得て行う必要があります。そのような共同作業を行うのであれば、協力を惜しむものではありませんし、むしろ望むところであります。

追悼



川上 享氏のご逝去を悼む

本会会員であった川上 享氏は、平成11年7月2日、肝不全のためご逝去されました。亡くなった当日は奇しくも氏の勤務先である資源・環境観測解析センター(ERSDAC)の年1回の成果報告会が開催された日であり、報告会に参加され

た方々はこの訃報に接し、とても信じられないという状態だったと伺っています。まだ現役でバリバリの川上氏が50才の若さでこのように簡単に亡くなったということを耳にしたとき、私も自分の耳を疑わざるを得ませんでした。

川上氏は今年打ち上げが予定されている人工衛星ASTER関係の打ち合わせのために6月14日の週に米国に出張され、20日に帰国されました。ただ、出張の最後の頃から体調不良(黄疸)だったようで、翌21日朝に病院に検査に行かれたということでした。ところが、検査に行った病院にそのまま入院ということになり、7月1日に容態が急変し、帰らぬ人となったと伺っています。

川上氏は昭和23年9月生まれで、昭和46年3月に東北大学理学部地学第一学科(地質学古生物教室)を卒業され、その後東北大学大学院理学研究科地学専攻修士課程に進学されました。昭和48年3月修士課程終了後、三菱石油開発株式会社に入社され、その翌年(昭和49年)10月から昭和50年2月までの間に、当時、三菱石油開発の子会社であったスマトラ石油とフランスのTotal社がジョイン

ト・ベンチャーで石油開発事業を行っていたインドネシア中スマトラの現場に駐在されました。この時にマラリアの予防薬、キニーネを服用していたとのことですが、このキニーネの服用が原因で肝臓を悪くし、肝炎を患うこととなりました。その後は海外勤務を控え、専ら日本国内において三菱石油開発が参加しているガボン沖のプロジェクトを担当し、また、新規プロジェクトの発掘に貢献されました。昭和64年1月にはERSDACに出向され、調査研究部調査課長として活躍されました。平成5年1月にはERSDAC側からの強い要望もあり、三菱石油開発会社を退社され、同センターに移籍されました。その後、平成9年1月には調査研究部長に昇進され、亡くなるまで同職でした。また、平成9年1月から平成10年12月の間は調査研究部長に加え、技術第二部長も兼務されています。ERSDACでの川上氏の業績を振り返ってみますと、平成4年度から平成9年度の間はサウジアラビアのKACST(King Abdul Aziz City for Science and Technology)との共同研究マネージャーとして日本のリモートセンシング技術の高さをサウジアラビアにアピールされ、また、平成9年5月からはASTER Science Project ManagerとしてASTER打ち上げ前の準備作業等で奔走しておられたようです。

今年の正月にいただいた川上氏の年賀状によりますと、1年遅れで今年ようやく打ち上げられることになったASTERセンサーがどんな新知見をもたらしてくれるかを楽しみにしておられていたようです。その楽しみにされていたASTERの打ち上げをみることもなく、お亡くなりになられたということはさぞかし無念であっただろうと思います。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第です。

(インドネシア石油 金森邦夫)

日韓構造地質研究会 第2回合同大会報告

氏家恒太郎（国立科学博物館）

上記大会が、去る1999年8月19日から8月23日までの5日間、北海道様似町において開催された。この合同大会は、昨年8月に韓国・ソウルで第1回が開催されており、今回は日本での初開催となるもので、日韓合わせて60名を超える人が参加して行われた。

8月19日の初日は、新千歳空港に午後1時集合し、その後バスで見学地の昭和新山へ移動した。昭和新山では、「ミマツダイアグラム」で有名な三松正夫さんの親族の方に、有珠火山と昭和新山の噴火や発達史に関して、流暢な英語で説明して頂いた。見学後は宿泊地である様似町のアポイ山荘に向けて、再びバスで移動した。様似町は日高山脈最南端の西側に位置し、えりも岬と浦河町の間にある。町のシンボリック存在でもあるアポイ岳は、貴重な高山植物が多数あることで世界的に有名で、これは様似の特殊な気候条件と、FeとMgを多量に含んだ幌満カンラン岩体が露出していることに由来しているようである。バスがアポイ山荘に着いた頃には、午後8時を過ぎていた。到着後すぐに夕食となり、夕食会場で様似町長や教育委員会の方々から熱烈な歓迎のご挨拶を頂いた。

続く8月20日は、様似町中央公民館において合同大会が開催された。まず最初に早稲田大の高木秀雄さん（構造研事務局）の挨拶後、3つのキーノート講演が行われた。狩野謙一さん（静岡大）は、日本列島の付加体における最近の研究の進展状況を紹介され、小松正幸さん（愛媛大）は、日高変成帯の地質と構造についてレビュー形式で紹介された。さらに木村 学さん（東京大）は、北海道のテクトニクスについて幅広い視点から紹介された。引き続いて“Geotectonic evolution of East Asia”と題した東アジアのテクトニクスに関する講演が、日韓双方の研究者によって行われた。講演全体を聴いて感じたことは、日本側はサハリン、ロシア沿海州、韓半島、中国など、周辺域の地質を考慮にいたったものが多かったのに対し、韓国側は個々の話はまとまっているものの、地域地質の色合い

が濃く、研究成果が東アジアにおけるテクトニクスの枠組みの中でどのようにとらえることができるのかの説明に欠けていた。また、各講演に対する討論もやや低調であった。これは発表の多くが昼食後に行われたことと、前日の長時間に渡るバスでの移動（昭和新山から様似まで約4時間）に起因していたのかもしれない。一方、夕方から行われたポスター発表では、活発な議論が至るところで展開されていた。実際、日韓両国ともポスターは力作ぞろいであった。

次の日からの2日間はいよいよ巡検である。8月21日の午前中は、澤口 隆さん（早稲田大）の案内のもと幌満カンラン岩体を見学した。露頭では幌満カンラン岩体の変形史とそのテクトニックな意義について、何人かの間で活発な議論が取り交わされた。個人的には、案内者の澤口さんと、巡検中バスですと隣りであった金沢大の森下知見さん（澤口さんと同じく卒論以来7年間、幌満カンラン岩体の研究をされている）のおかげで、幌満カンラン岩体の特に岩石学的特徴を理解することができた。午後からは在田一則さん（北海道大）、豊島剛志さん（新潟大）、小山内康人さん（岡山大）の案内で、日高変成帯中に発達するマイロナイト、グラニユライト、S-type トーナライト、シュードタキライトなどを観察した。

巡検2日目の8月22日は、午前中、浅野祐史さん（千葉大、現在は佐原中）と金川久一さん（千葉大）の案内で、北海道中軸部に分布する白亜紀後期から第三紀初期の付加体であるイドンナップ帯を観察した。イドンナップ帯は、四万十帯の延長であると考えられているが、最初に見学したイドンナップ帯の西部に分布するメランジュに関しては、構成岩相の特徴や年代がむしろ三宝山帯に類似しているという指摘があり、うなずけるものがあつた。次の見学地点では、コヒーレントユニット中に逆転したタービダイト層があるとのことであつたが、実際は層平行伸長に関連して形成された正断層や膨縮構造の発達によって、地層はメランジュ化していた。イドンナップ帯は露頭状況があまり良くないのが残念であつたが、これは60名を超える人数では好露頭へのアクセスが難しいため、致し方なかったのであらう。巡検案内書を参照する限り、イドンナップ帯は日高変成岩類の上昇による影響を受けており、付加に伴う初生構造がかなり改変されているようである。昼食を挟んで午後からは、木村 学さんの案内のもと、えりも岬近辺の海岸沿いに露出する変形した礫岩、歌露礫岩を観察した。この地域は露頭状況が素晴らし



写真1 日韓の参加者達、日高帯の巡検にて。



写真2 中期中新統、歌露礫岩に記録された右横ずれ変形。ハンマーの全長は28 cm。

く、右横ずれ断層運動に伴って形成された R_1 面、 R_2 面、褶曲などの変形構造や、圧縮時に形成された共役断層や低角逆断層を観察することができた。花崗岩礫内部にも時折共役断層が認められ、その剪断面角と R_1 面と R_2 面のなす角がほぼ一致しており、右横ずれ断層運動時にこれらの共役断層が活動し、 R_1 面と R_2 面として機能したことが示唆される。木村さんの説明によれば、右横ずれ断層運動は晩新世から中新世にユーラシアプレートとオホーツクプレート間に存在したトランスフォーム境界の運動像を反映しているのに対し、圧縮性の変形は中新世以降の千島前弧スリバーの西進・衝突と関連しているとのことであった。

大会期間を通じて韓国の方々と交流する機会を持てたわけであるが、大会において何が一番印象的であったかを何人かに訪ねたところ、先生方は初日に見学した昭和南山、院生らは韓国にないということで付加体であった。個人的には、毎晩2時頃まで一緒に酒を飲んだせいもあって、地質以外のこと、例えば韓国での日常生活における礼儀作法（儒教の考えが私の想像以上に根強かった）、野球、男女関係などについて色々と話をするのができ、大変有益であった。

今回の合同大会は、私にとって東アジアのテクトニクスや島弧会合部の地質を理解するうえで非常に有意義であったが、それにも増して印象的だったのが、様似町の人達の熱烈な支援・歓迎ぶりと地質（屋）に対する理解の深さである。例えば、今回の宿泊地であるアポイ山荘の隣には研究者支援施設があり、研究者は低料金で宿泊や炊事をするができる。様似の人達には期間中、裏方として大会の運営に様々な面でアシストをして頂いた。また食事も、期間を通じて本当においしいものを提供して頂いた（特にさんまのさし

みは絶品）。最終日の夜には、なんとバーベキューまで主催して頂き、地元料理の「ちゃんちゃん焼き」（鉄板上でさけをほぐし、それをキャベツやアスパラなどと混ぜてみそで炒めたもの。これまた絶品）や牛肉、野菜などをビールとともにご馳走になった。バーベキューの後半はいつしか歌合戦となり、日本側からは「都の西北〜」で始まる早稲田大の校歌や北海道大の寮歌、韓国側からは韓国地質学会の歌（ハンマーを持って今日も調査に行くぞといった内容の歌だったと思う）、様似の方々には「ソーラン節」などを披露して頂いた。そして最後は全員で「釜山港へ帰れ」を熱唱した。このような地元の方々や日韓双方の研究者とのふれあい・深い絆は見ていて本当に感動的である。これは、各大学の研究者らが、これまで日高地域の研究を長年に渡り地道に続けてこられたことによるところが大きい。巡検案内書だけ取り上げても明らかであるが、ほとんどの人が地質図を丹念に作成しており、精度の高い研究をされている。地元の人たちとの親睦度といい、本当に見習うべき研究姿勢であると感じた。

最後に、この素晴らしい合同大会開催に向けてご尽力され、成功に導いて下さった高木秀雄さん、澤口 隆さんをはじめとする早稲田大の方々並びに巡検案内者の方々、そして期間中大変お世話になった様似町の方々に深く感謝致します。様似町、万歳!!

常時投稿をお待ちしております。院生コーナーの編集は、現在、以下の2人で行っております。e-mailでいただければ幸いです。（顔ぶれが変わりました）

698g5040@mn.waseda.ac.jp
massago@geo.titech.ac.jp

島田耕史（早大）
真砂英樹（東工大）

若手研究者懇親会のお知らせ (10月10日 18:00-20:00 第9会場)

第106回年会の夜間小集会において、毎年恒例の『若手研究者懇親会』を行います。日頃顔を会わせる機会のない全国の若手研究者諸氏といろいろ語り合えるチャンスです。院生会員のみならず、広く若手研究者の参加を歓迎します。今年度は特に若手研究者の就職問題に焦点をあててみたいと考えています。

（世話人：真砂英樹，Martin James Andrew）

CALENDAR

1999, 10 ~

地球科学分野に関係する研究会、学会、国際会議などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内いたします。会員の皆さまの情報をお待ちしています。

☆印は、日本地質学会主催行事。

10月 October

○第7回太平洋地域新第三系国際会議

3日(日)~6日(水) The 7th International Congress on Pacific Neogene Stratigraphy
場所：国立メキシコ大学 主催：RCPNS (太平洋地域新第三系層序委員会) 連絡先：Prof. A. Molina-Cruz, Organizing Committee of VII-RCPNS, Inst. Cien. Mar. Lim., UNAM, Ap. Post. 70-305, Ciudad Universitaria, Mexico D.F. 04510 Fax: 52-5-6160748 国内連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一 電話 054-238-3240 Fax 054-238-3241 e-mail: vyz01052@nifty-serve.or.jp 会議前後にExcursionを計画、First Circularは10月に発送される予定。

○日本地質教育学会シンポジウム—新教育課程で求められる地学教育のあり方について—
9日(土) 会場：国立教育研究所大会議室4階(目黒区) 連絡先：国立教育研究所科学教育研究センター 地学教育研究室 五島政一 電話 03-5721-5076 下野 洋 電話 03-5721-5085 Fax 03-3714-7043

☆日本地質学会第106年大会

9日(土)~11日(月) 場所：名古屋大学

○日本火山学会1999年秋季大会

9日(土)~11日(月) 講演会(神戸大学)
12日(火) 現地討論会(神鍋火山)

○第19回南極地学シンポジウム

14日(木)~15日(金) 場所：国立極地研究所 連絡先：電話 03-3962-8095, Fax 03-3962-5741 (担当：三浦, E-mail: miura@nipr.ac.jp)

○自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウム「博物館の21世紀—ナチュラリヒストリーの未来—」

16日(土) 午後1時から4時30分 主催：自然史学会連合・日本学術会議ミュージアム小委員会 後援：国立科学博物館 場所：国立科学博物館新宿分館・研修館4階講堂(詳細はニュース誌8号)

細はニュース誌8号)

○GPS国際シンポジウム

18日(月)~22日(金) 会場：つくば国際会議場 主催：測地学会、地震学会、火山学会ほか

○第15回ゼオライト研究発表会

21日(木)~22日(金) 会場：北見市民会館(北海道北見市常盤町2-1-10) JR北見駅から徒歩約10分、女満別空港から北見市内行きバスにて北見バスターミナル下車(約45分)後、徒歩約10分 テーマ：ゼオライトおよびその類縁化合物に関連した研究の基礎から応用まで 申込先：〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 東京工業大学理工学研究科化学専攻八幡研究室気付 ゼオライト研究発表会係(小松隆之)宛

○第113回化石研究会例会

23日(土)~25日(月) シンポジウム「地球の環境と生物の進化」と野外観察会を予定
会場：岡山大学理学部付属牛窓臨海実験所岡山県邑久郡牛窓町鹿忍130-17 電話 086934-5210 Fax 086934-5211 世話人 白井浩子(詳細は本誌)

11月 November

○第3回活断層調査成果報告会

8日(月) 9:30~17:00~9日(火) 9:30~17:00 会場：笹川記念会館 国際ホール(東京都港区三田3-12-12) 主催：科学技術庁 問い合わせ・申込先：〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-5-18 千代田本社ビル5階(財)地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター活断層報告会係 電話 03-3295-1501 Fax 03-3295-1507 参加ご希望の方は11月2日(火)までに、下記までファックスまたははがきにてお申し込み下さい。(詳細は本誌)

○東海地震防災セミナー1999のお知らせ[第16回]

11日(木) 13:30~16:00 会場：静岡商工会議所会館5階ホール(JR静岡駅北口西側) テーマ：東海地震防災への新たな取り組み 主催：東海地震防災研究会 連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 電話 054-238-3240 Fax: 054-238-3241

○横浜国立大学創立50周年記念 公開講座 生命・環境における情報フロンティアと新技術—生命情報学の目指すもの—

13日(土)・11月20日(土) どちらの日も 13:00~17:10 主催：横浜国立大学(インターネットホーム

ページ <http://www.ynu.ac.jp> 会場：横浜国立大学 教育文化ホール(横浜市保土ヶ谷区常盤台79番地)(詳細は本誌)

○日本地震学会1999年度秋季大会

17日(水)~19日(金) 場所：宮城県民会館・仙台市民会館(仙台市)

○Geo Eng 2000：地盤工学と地質工学に関する国際会議

19日(金)~24日(水) 開催地：オーストラリア メルボルン

☆日本地質学会環境地質研究委員会第9回環境地質学シンポジウム

期日：25日(木)~26日(金) 会場：早稲田大学国際会議場会議室

12月 December

○科学者・技術者100万人集会 第9回「科学技術振興・推進に関するシンポジウム」—科学技術と社会—

17日(金) 13:20~17:20 会場：鹿島KI地下大会議室 東京都港区赤坂6-5-30(電話 03-5561-2111) 主催：社団法人日本工学会(詳細は本誌)

2月 February 2000

○第9回フィッショントラック年代学国際会議 9th International Conference on Fission Track Dating and Thermochronology

6日(日)~11日(金) オーストラリア ローン 問い合わせなど：<http://ft2000.unimelb.edu.au>

8月 August

○国際シンポジウム ZMPC 2000 International Symposium on Zeolites and Microporous Crystals

6日(日)~9日(水) 主催：ゼオライト学会 会場：仙台国際センター(仙台市青葉区青葉山)(詳細は本誌)

○31回万国地質学会

6日~17日 ブラジルのリオデジャネイロにて開催 講演要旨締め切り：1999年9月1日 参加申込締め切り：1999年12月1日 詳細はインターネット www.3ligc.org を参照されたい。

○第5回国際地形学会

23~28 会場：中央大学後楽園キャンパス First circular配布中 内容等問い合わせ先：柏谷健二(金沢大理学部) 電話：Fax 076-264-5735 5th ICG home page：<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jgu/>

お知らせ

第106年学術大会（名古屋）行事委員会・準備委員会ニュース

1. 夜間小集会追加および会場変更のお知らせ

こちらの不手際でプログラムでは抜けておりましたものの追加と、これとの関係で、「南極地質夜間小集会」の会場を変更させていただきますのでご了承下さい。

（追加：10日開催）

2003年ハットンシンポジウムとこれからの花崗岩研究：中島 隆ほか＜第1会場，18：00～20：00＞ 表記シンポジウム開催地に日本が立候補することがすでに決定，今回の小集会では，9月のフランス大会での立候補合戦の報告と，その結果をふまえて今後の花崗岩研究の戦略について話し合う。

（会場変更：10日開催）

南極地質夜間小集会＜第1会場，18：00～20：00＞を，＜34番教室，18：00～20：00＞に変更します。

2. 下記の2件の一般発表は，とり止めとなりましたのでお知らせします。

O-66 大原 隆ほか，P-45 三重野久美

3. 普及行事の見学旅行の訂正とお詫び

ニュース誌7月号，8月号のプログラムでご案内しました普及行事の見学旅行欄に以下の誤りがありました。皆様と関係機関にたいへんご迷惑をおかけしましたこと深くお詫びをし，訂正いたします。

誤）3段目の見学コースの中で，“豊田市西幸町”→ 正）“豊橋市西幸町”

誤）4段目の申込方法の中で，“Fax 0572-68-7710”→ 正）“Fax 0572-66-1122”

4. 会員向け見学旅行申込受付延長

見学旅行の申込受付締め切り日は過ぎましたが，以下の班についてはまだ定員に余裕がありますので，引き続き申込を受け付けます。期日が迫っておりますので，E-mailでも受け付けますので，下記まで，お早めにお申し込み下さい。

第1班：活断層・地震地球化学観測点

第2班：春日接触変成作用とドロマイトスカルン

第4班：濃飛流紋岩

第7班：三河地方東部の領家帯

第9版：紀伊半島の秩父帯・黒瀬川帯

連絡先：日本地質学会第106年学術大会（名古屋）準備委員会 庶務係 竹内 誠

電話 052-789-2525，Fax 052-789-3033，E-mail：takeuchi@eps.nagoya-u.ac.jp

〒464-8602 名古屋市中千種区不老町 名古屋大学大学院理学研究科地球惑星理学専攻

企画募集

地質学会第107年総会（筑波大学）における シンポジウム・ショートコースの企画募集

第107年総会は，2000年3月18～19日と筑波大学のお世話で開催されます。その際に行われるシンポジウムとショートコースの企画を下記のとおり公募いたします。以下のような枠組み下での開催となりますが，多くの方からのユニークで魅力ある企画を期待しています。応募多数の場合には，応募者の意向を尊重しながら調整させていただく場合もありますので，あらかじめご了承下さい。

期 間：2000年3月18日午後～19日夕方（18日午前は特別講演や総会議事などが予定されています）

会 場：筑波大学学生会館（2会場利用可能，定員350および160名）

申し込み期限：1999年10月末

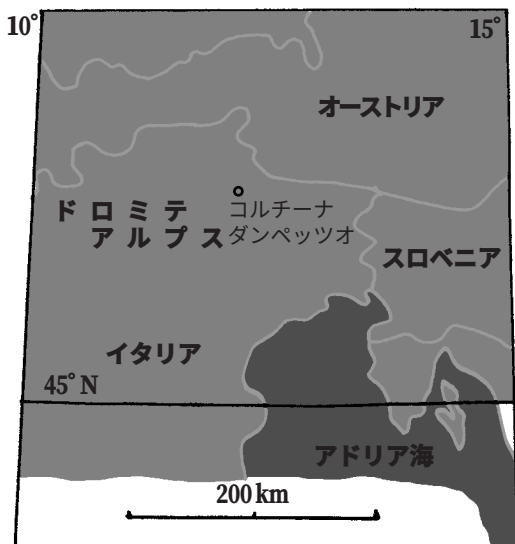
申し込み先：日本地質学会事務所 行事委員会

募集内容：

- 1) シンポジウム：半日単位であれば計6テーマが可能。世話人，テーマ名とねらい，会場の希望，日程などをお知らせ下さい。
- 2) ショートコース：いろいろな分野・テクニックについて若手向けのハウツウを講習/講演で身につけてもらう新企画です。会場としては，地質調査所や東京周辺の研究機関を利用させてもらうことも可能です。事前申し込みで参加者を募集し（有料），講師には相応の謝礼を払う予定です。テーマ，定員（最大と最少），セールスポイント，会場の希望などをお知らせ下さい。



北イタリア、ドロミテ・アルプスの石灰質岩



ドロミテ・アルプスは、北イタリアに主として分布する「南アルプス」(Southern Alps) (地質区としての) の中東部に位置している。この地帯はDolomites (あるいはDolomiti, Dolomiten) と呼ばれ、ドロマイトを主とする、厚さ3,000 m前後の大部分海成の石灰質三畳系が広く分布している。構造的には、Insubric構造線によって隔てられている北側の「西アルプス」(主としてスイス) や「東アルプス」(主としてオーストリア) とは異なっており、衝上断層を伴いながらも比較的緩やかな地質構造を示している。

この厚い三畳紀の石灰質岩は一部に泥質岩を挟みながら、ドロミテ・アルプスの高さ2,000~3,000 m級の山岳地帯の谷底部から山頂部、すなわちほとんど全山を占めて広域的に分布している。そして、全体にわたっての灰白色の色調、ほとんど植生に被われていない急峻な山腹や鋭い尖峰、氷河による深い浸食谷等を含む独特な風化・浸食地形等が素晴らしい景観を創り出しており、ドロミテ・アルプスを世界的に有名な景勝地としている。

表紙写真に掲げた露頭は、北イタリアの、オーストリアとの国境の南方10数kmに位置するトレ・チマ・デイ・ラバレード (Tre Cime di Lavaredo) (和名では「三姉妹峰」と呼ばれている) の一つ、チマ・ピッコラ (海拔高度約3,000 m; 崖の高さは200 m程度) である。すぐ隣にある他の2つの峰 (写真の枠外左側) も全く同様に、およそ20°程度傾く穏やかな構造の、層理が非常に明瞭な、層状ないし板状の石灰質岩からなっている。裏表紙の写真は層理の発達状況を示す。

この「三姉妹峰」は、ドロマイトの山々に囲まれた、ドロミテ・アルプス山中の代表的リゾート地の一つ、コルチーナ・ダンベッツォ (Cortina d'Ampezzo) から北東約12 kmのところには、クリスタロ (Cristallo) と呼ばれるもっと規模の大きな山を初めとして、同様な石灰質三畳系からなる多くの山々があるが、この三姉妹峰は周囲から孤立的に突出して存在し、19世紀から登山家による登頂の対象となってきたそうである。この写真の撮影時にも、写真の右側のチマ・ピッコリシマ (その一部が右端に写されている) の壁の中腹で5名のチームによるロック・クライミングが試みられていた。

(水野篤行)